津幡町

能瀬南Ｂ遺跡

２０１６

石川県教育委員会

（公財）石川県埋蔵文化財センター

能瀬南（のせみなみ）Ｂ遺跡

2016

石川県教育委員会
（公財）石川県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は能瀬南Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は石川県河北郡津幡町能瀬地内である。

3　調査原因は地方道改築事業(主)高松津幡線(河北縦断道路)工事であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成25(2013)年度より公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)が石川県教育委員会から委託を受けて、平成23年度から平成27年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書原稿作成、報告書刊行である。

5　調査に係る費用は石川県土木部道路建設課が負担した。

6　現地調査は平成23・24年度に実施した。期間・面積・担当は下記のとおりである。

《平成23年度》

期　間　平成23年８月１日～同年12月21日

面　積　250㎡

担　当　調査部県関係調査グループ

布尾和史(専門員)、荒木麻理子(主任主事)、木原伊織(嘱託調査員)

《平成24年度》

期　間　平成24年４月10日～同年８月８日

面　積　2,820㎡

担　当　調査部県関係調査グループ

澤辺利明(主幹)、山　晶裕(専門員)、木原伊織(嘱託調査員)

7　出土品整理は平成25年度に実施し、県関係調査グループが担当した。

8　報告書原稿作成は平成26年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。
執筆は澤辺利明が行った。

9　報告書編集・刊行は平成27年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。

10　調査には下記機関の協力を得た。
石川県土木部道路建設課、石川県県央土木総合事務所、津幡町教育委員会

11　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

12　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1)方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

(2)水平基準は海抜高であり、Ｔ.Ｐ.（東京湾平均海面標高)による。

(3)遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。

ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝、Ｐ：柱穴・小穴

(4)遺物番号は挿図・観察表・図版で対応する。なお、観察表には報告番号や出土遺構、器種、調整等の遺物観察事項のほか、出土品整理時の図化番号を記載した。

(5)遺物実測図は、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとし、弥生土器の赤彩、近世土師器の油痕は網掛けで示した。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過…… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　発掘作業の経過…… 2
　第３節　整理作業の経過…… 4
第２章　遺跡の位置と環境…… 5
　第１節　地 理 的 環 境 …… 5
　第２節　歴 史 的 環 境 …… 5
第３章　調 査 の 結 果 …… 8
　第１節　概　　要 …… 8
　第２節　検出遺構・遺物…… 12
　第３節　ま　と　め …… 18
写　真　図　版
報 告 書 抄 録

挿 図 目 次

第 1 図　調査区の位置 …… 3
第 2 図　工事計画と調査区の位置 …… 3
第 3 図　遺跡の位置 …… 5
第 4 図　能瀬南Ｂ遺跡と周辺の遺跡 …… 6
第 5 図　調査区割り、グリッド呼称 …… 8
第 6 図　調査前の地形１（平面図） …… 9
第 7 図　調査前の地形２（エレベーション、
　　地すべり・削平推定範囲） ……10
第 8 図　調査区斜面土層断面図 ……11
第 9 図　調査区全体図 ……13
第10図　調査区平面図１ ……14
第11図　調査区平面図２ ……15
第12図　調査区平面図３ ……16
第13図　検出遺構・遺物１（ＳＫ01・02） ……19
第14図　検出遺構・遺物２（ＳＫ03） ……20
第15図　検出遺構・遺物３（ＳＫ04・05） ……21
第16図　検出遺構・遺物４（ＳＫ06・07） ……22
第17図　検出遺構・遺物５（ＳＫ08、Ｐ１・２） 23
第18図　検出遺構・遺物６（ＳＤ01・02） ……24
第19図　検出遺構・遺物７（南東斜面１）……25
第20図　検出遺構・遺物８（南東斜面２）……26
第21図　検出遺構・遺物９
　　（トレンチ、南東斜面遺物１） …27
第22図　検出遺構・遺物10（南東斜面遺物２） …28
第23図　検出遺構・遺物11（南東斜面遺物３） …29
第24図　検出遺構・遺物12（南東斜面遺物４） …30
第25図　検出遺構・遺物13（南東斜面遺物５） …31

表　目　次

第1表　周辺の遺跡一覧表……７　　第２表　出土遺物観察表１……32　　第３表　出土遺物観察表２……33

図版目次

図版１　遺構１
図版２　遺構２
図版３　遺構３
図版４　遺構４
図版５　遺構５
図版６　遺構６
図版７　遺構７
図版８　遺構８
図版９　出土遺物１
図版10　出土遺物２
図版11　出土遺物３
図版12　出土遺物４
図版13　出土遺物５

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

本書は、地方道改築事業主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）工事に伴う、能瀬南Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。能瀬南Ｂ遺跡に重複しては７世紀第２四半期の須恵器窯である加茂２号窯が存在し、並行して発掘調査を実施したが、この２号窯については、隣接する加茂遺跡および加茂遺跡に重複する加茂１号窯とあわせ、今後報告することとする。

主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）は、かほく市免田で国道159号押水バイパスから分岐し、津幡町加茂で国道８号津幡北バイパスに接続する延長13.3kmの道路である。石川県長期構想の一つ「県土ダブルラダー結いの道」整備構想の南北幹線に位置づけられており、金沢市と七尾市を結ぶ国道159号の渋滞緩和や緊急時の代替道路、周辺に立地する工業団地や県立高松病院、レクリエーション施設へのアクセス向上を図り計画された。平成６年度に事業着手し、平成12年度には１期区間の宝達志水町免田～かほく市谷間6.6kmが、平成19年度には２期区間のかほく市谷～上山田間3.3kmが共用されている。

石川県教育委員会事務局文化財課（以下「文化財課」）では毎年、関係部局に対し実施予定事業の内容照会を行い、各事業について埋蔵文化財の保護が図られるよう調整を行っている。上記道路改築事業についても所管の土木部道路建設課と協議しながら、順次、分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の有無を確認しており、埋蔵文化財が確認された箇所については、その取り扱いを協議、事業内容を調整するなどし発掘調査等の保護措置を実施してきた。

発掘調査地に接しては、加茂遺跡や能瀬南遺跡などの発掘調査が実施されており、平成20年度の加茂遺跡調査中には遺跡北端の緩斜面において中世の集落下より加茂１号窯が発見された。また、能瀬南Ｂ遺跡については、平成20年12月19日に文化財課が実施した分布調査により丘陵上部において弥生時代後期の遺跡として確認された。文化財課は土木部道路建設課に対しこれら調査結果を報告するとともに、埋蔵文化財包蔵地において路線変更等によりその保護が図られるよう設計の見直し等を要請した。以後、文化財課、道路建設課および現地工事を担当する県央土木総合事務所との協議を継続した結果、現状でルート変更は困難であり、工事の実施も急がれることから、当該箇所については事前の発掘調査を行い記録保存とすることとなった。

冒頭で記したように本書では弥生時代の集落跡である能瀬南Ｂ遺跡の調査結果を報告する。このことについて、７世紀前半の須恵器窯である加茂窯跡は平成20年度に１号窯が知られ、これに接した平成23年度の能瀬南Ｂ遺跡調査区域にも存在が予想されたが、はたして１号窯の７ｍ上方でさらに１基（加茂２号窯）確認され、平地部の加茂遺跡と丘陵部の能瀬南Ｂ遺跡に重複して分布する埋蔵文化財包蔵地「加茂窯跡群」と命名されたものである。遺跡立地から加茂１号窯は加茂遺跡の、２号窯は能瀬南Ｂ遺跡の発掘調査の中で一体で発掘されたわけであるが、２号窯は斜面上部にあって地すべりを被り窯奥部の窯床約３ｍが遺存したのみで、出土須恵器も10点弱とごく少ない。下方に位置した１号窯も地すべりの影響を被ったが遺存は比較的良好で一定量の遺物出土があり、加えて窯の焼成品が加茂遺跡の古墳後期の遺構から出土するなど、窯跡理解には加茂遺跡と一体の報告が不可欠と判断されたことから、本報告では加茂２号窯は概略を記すにとどめ、今後刊行される加茂遺跡の報告所で１号窯と一括して記述することとした。

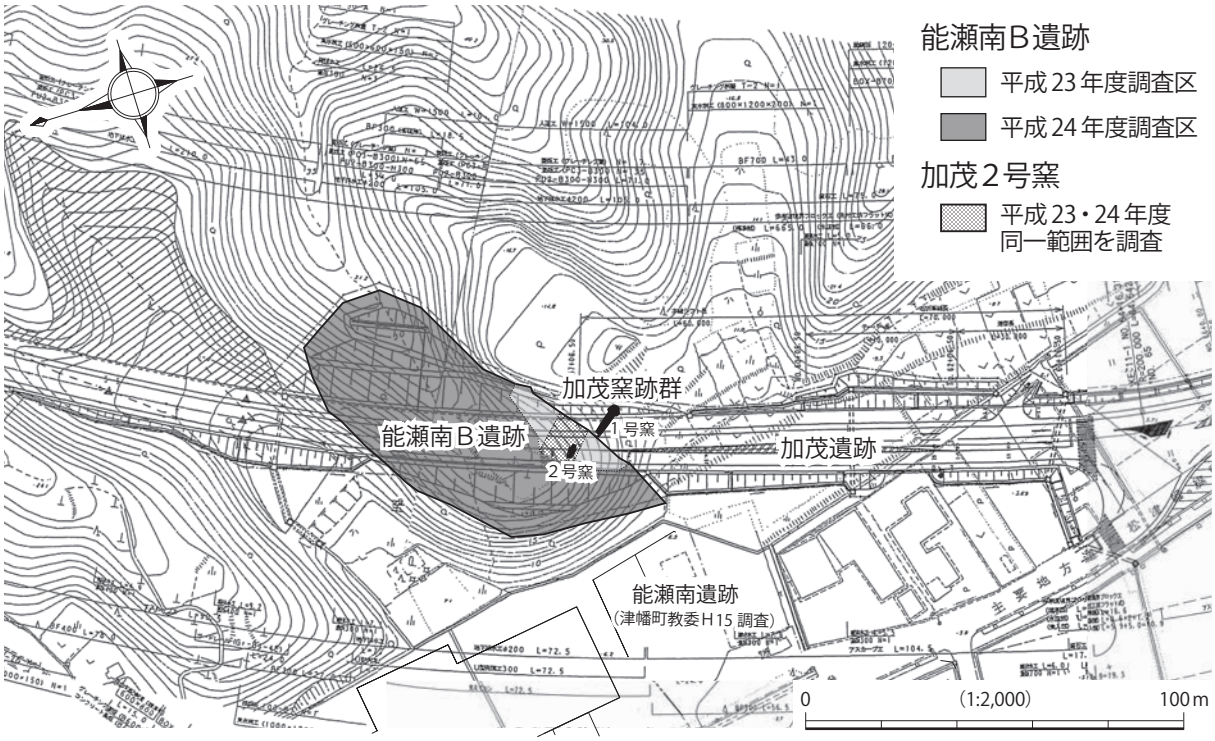
第２節　発掘作業の経過

発掘調査は石川県土木部道路建設課からの依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、平成23・24年度に財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が実施した。

平成23年度　能瀬南Ｂ遺跡調査範囲のうち丘陵南側斜面裾部の250㎡（加茂２号窯範囲100㎡と重複）を調査対象とし（第２図）、調査部県関係調査グループ布尾和史、荒木麻里子、木原伊織が担当した。発掘調査の実施に際しては県教委と埋文センターとの間で４月１日付けで発掘調査等業務委託契約を締結。また、埋文センターは文化財保護法第92条第１項の規定に基づく発掘調査届（平成23年７月21日付け財埋第275号）を県教委あて提出し、教育長から「発掘調査届に対する通知について」（平成23年７月22日付教文第1218号）を受けた。６月29日に文化財課と埋文センター、7月11日に現地土木工事を主管する県央土木総合事務所と文化財課、埋文センターによる事前の現地協議を行い、道路建設事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。８月５日に発掘機材搬入および丘陵斜面の下草・小木伐採を始め、８月８日から重機による表土除去実施。幅約40ｍ、高さ約８ｍの斜面中には、丘陵上部の渡辺家墓所（近世、一帯の十村（他藩の大庄屋に相当）を代々務めた家柄、調査時は丘陵奥に移転済み）から転落あるいは投棄された近世以降の土師器皿や陶磁器が多数散布しており、これを取り上げながら順次掘り下げていった。調査地は急斜面であり、ロープと安全帯で体を支えながら、厚く堆積する崩落土に難儀しながらも、ところどころで出土する焼土や窯体片に窯跡の存在を期待する中での作業であった。斜面にはトレンチ１～９（第19図）を設定し、土層断面を確認しながら面的掘り下げを行い、８月24日までには大部分を流失しながらも窯体奥部辺りを残す須恵器窯１基（加茂２号窯）を確認した。９月９日には空中写真測量を実施し、12日には文化財課による調査状況確認を受けた。この時点で、調査区外に延びている窯尻部には立木が存在し、地表から高いこともあって拡張作業は容易ではないことから今年度は窯跡検出段階でとどめ、窯体内部の調査は丘陵上部も対象となる次年度に行うこととなった。９月14日にはシート、土嚢により窯体表面を覆い能瀬南Ｂ遺跡の調査は終了。９月初めからは加茂遺跡の調査も並行していたが、以後、本格的に加茂遺跡の調査に着手する。

平成24年度　加茂２号窯100㎡を含む、能瀬南Ｂ遺跡2,820㎡を調査対象とし、調査部県関係調査グループ澤辺利明、山　晶裕、木原伊織が担当した。４月１日付けで県教委と埋文センターとの間で発掘調査等業務委託契約を締結。埋文センターは文化財保護法第92条第１項の規定に基づく発掘調査届（平成24年４月10日付け財埋第18号）を県教委あて提出し、教育長から「発掘調査届に対する通知について」（平成24年４月10日付教文第148号）を受けた。４月20日に県央土木総合事務所と文化財課、埋文センターおよび立木伐採業者による事前の現地協議を行った。その中では調査地が丘陵先端の山林であること、現地への進入路が南方からに限られること、用地境界が斜面裾、場所によっては斜面中途に位置することなどから、特に立木伐採の方法や調査時の排土置き場などが協議された。立木について、丘陵上部および南側斜面の伐採・搬出は速やかに実施できるものの、北側斜面については大木が多数存在することから重機を用いた作業が必要であるとされ、遺跡損壊を避けるためこの北側斜面の立木伐採は丘陵上部の発掘終了後に実施となった。埋文側でも、丘陵上部・北側斜面の表土除去用重機進入には調査区域を通過せざるを得ず、排土置き場も限られたことから、調査区を１区：南西側斜面、２区：南東側斜面、３区：丘陵上部、４区：北側斜面に分割（第５図）、順次調査実施。調査済み区域を排土置き場とすることとし、調査手順は、１～３区立木伐採→１・２区発掘→３区発掘→

第１図　調査区の位置



第２図　工事計画と調査区の位置

４区立木伐採→４区発掘とした。

調査着手にあたっては、丘陵斜面には須恵器窯が、丘陵上部には弥生時代の墳丘墓の存在が予想されたことから、立木伐採後に調査前の地形測量（第６図）を実施、その後５月７日から１・２区の表土除去を行った。今年度調査区域は昨年度に増して高所・急傾斜地であることから、ネットフェンスと通路を設置し転落防止と足場を確保、斜面では安全帯を着用して作業を行った。２区では斜面の掘削とともに加茂２号窯の発掘を行い、６月８日に１・２区空中写真測量を実施。続いて丘陵上部の３区に着手した。３区の南西半部は渡辺家墓地造営にともない改変され遺構も削平を受けていたが、弥生時代後期の大型土坑や溝が遺存した。また、丘陵部南東側が広範に地すべりを起こしていることが判明したが、その斜面中途で大型土坑２基を確認した。３区は６月21日に空中写真測量を実施した。その後４区の立木伐採・搬出を待って７月５日から表土除去、遺構検出を行った。南東側に比べ緩斜面であったものの路線境界が斜面中途にあったことから排土を下方へ流すわけにはいかず、猛暑が続くの中その運搬に苦慮した。ただ、尾根上の休憩場所からは、河北潟干拓地にひろがる水田地帯やその先の内灘丘陵が見晴らされ、涼やかな風も絶えず絶好の息抜きとなった。４区では須恵器窯等の遺構は確認されず７月26日に空中写真測量実施。７月30日に県央土木総合事務所に現場を引き渡し、８月３日には発掘機材を搬出し現地調査を終了した。

◎調査体制

業務内容	発　掘　調　査	発　掘　調　査
調査期間	平成23年11月１日～同年12月21日	平成24年４月10日～同年８月８日
調査主体	(財)石川県埋蔵文化財センター (理事長　竹中　博康)	(財)石川県埋蔵文化財センター (理事長　木下　公司)
総　括	浜崎　洋(専務理事)	岡田　義彦(専務理事)
事　務	栗山　正文(事務局長)	栗山　正文(事務局長)
総　務	浅香　繁晴(総務グループリーダー)	山口　登(総務ＧＬ)
経　理	谷内　孝夫(総務グループ主幹)	谷内　孝夫(総務グループ主幹)
調　査	三浦　純夫(所長)	三浦　純夫(所長)
	福島　正実(調査部長)	福島　正実(調査部長)
	土屋　宣雄(県関係調査グループリーダー)	土屋　宣雄(県関係調査グループリーダー)
担　当	布尾　和史(県関係調査グループ専門員)	澤辺　利明(県関係調査グループ主幹)
	荒木　麻理子(県関係調査調査グループ主任主事)	山　晶裕(県関係調査調査グループ専門員
	木原　伊織(県関係調査グループ嘱託調査員)	木原　伊織(県関係調査グループ嘱託調査員)

第３節　整理作業の経過

出土品整理・報告書原稿作成・報告書刊行は事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として埋文センターが実施した。担当は県関係調査グループである。出土品整理は平成25年度に実施。内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレースおよび遺構実測図のトレースである。報告書原稿作成は平成26年度に、報告書編集・刊行は平成27年度に実施した。

◎整理体制

業務内容	出 土 品 整 理	報告書原稿作成	報告書編集・刊行
整理期間	平成25年６月24日～同年７月12日	平成26年４月１日～平成27年３月31日	平成27年４月９日～平成28年３月31日
整理主体	(財)石川県埋蔵文化財センター (理事長　木下　公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長　木下　公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長　木下　公司)
総　括	橋本　定則(専務理事)	小﨑　隆司(専務理事)	柴田　政秋(専務理事)
事　務	栗山　正文(事務局長)	栗山　正文(事務局長)	釜親　利雄(事務局長)
総　務	山口　登(総務グループリーダー)	山口　登(総務グループリーダー)	長嶋　誠(総務グループリーダー)
経　理	小松　孝弘(総務グループ主幹)	長嶋　誠(総務グループ主幹)	東　賢吾(総務グループ主幹)
整　理	福島　正実(所長)	福島　正実(所長)	福島　正実(所長)
	藤田　邦雄(調査部長)	藤田　邦雄(調査部長)	藤田　邦雄(調査部長)
	松山　和彦(県関係調査グループリーダー)	松山　和彦(県関係調査グループリーダー)	松山　和彦(県関係調査グループリーダー)
担　当	調査部県関係調査グループ	調査部県関係調査グループ	調査部県関係調査グループ

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

能瀬南Ｂ遺跡は、石川県河北郡津幡町能瀬地内に所在する。石川県は日本列島のほぼ中央に位置し、日本海に突き出た半島域の能登地方と南部の加賀地方に分けられる。津幡町は加賀地方の北部にあって、東西14.2㎞、南北17.1㎞、面積約110.5k㎡。町域北部および東部は石川・富山県境に連なる宝達丘陵南部域にあたり、西部、北部は河北潟と金沢平野北端に接する。丘陵地の基盤は新第三紀の泥岩、砂岩、凝灰岩からなり崩壊しやすい地盤であることから、傾斜の割には各所で開析が進んでおり、小谷が樹枝状に入り組み谷底平野が各所で発達している。河北潟は古墳時代には潟湖となったとされ、現在は干拓により北側1/3が残るのみとなったものの、かつては北陸最大の湖沼であった。また、丘陵地と河北潟の間には津幡川や能瀬川をはじめ中小河川により形成された幅２～３㎞の沖積低地が広がっている。

国土地理院「ウエブ地図」を改変

第３図　遺跡の位置

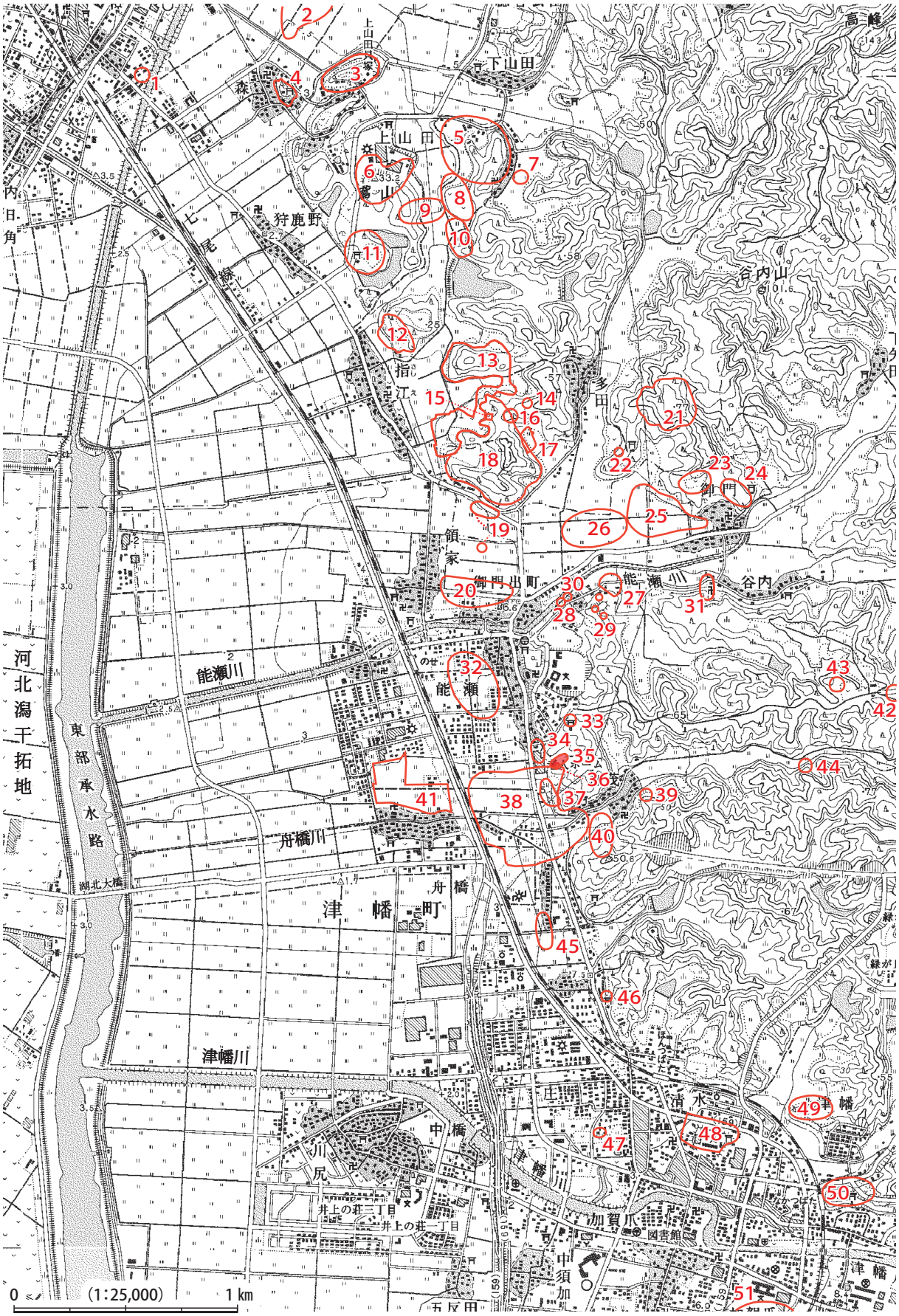
津幡の地名は河北潟舟運の停泊地に由来するとされ、峠越しに富山につながる街道と河北潟東縁沿いに能登に向かう街道の分岐点として、古代には深見駅が、近世では津幡宿、竹橋宿が置かれた交通の要衝地であり、県境の倶利伽羅峠付近は源平合戦など多くの合戦の舞台となった。

津幡町能瀬は町域の北西部を占める英田地区に属する。おもに能瀬川流域に沿って細長く延びる英田地区の名は、古代の「加賀郡英多郷」、中世の「英田保」を由来とし、明治22（1889）年に舟橋、能瀬、領家、谷内、加茂からなる東英（ひがしあがた）村が発足。同40（1907）年には上流域の種谷村と合併し英田（あがた）村、昭和29（1954）年には津幡町英田地区となっている。能瀬は能瀬川下流域の丘陵裾から河北潟に接する低地にあって、地内を能登街道が通っていた。中世英田南保の内にあり、正平9（1354）年の「後村上天皇論旨（摂津水無瀬神宮文書）」に「能勢」が、天正14（1586）年の「前田利家印判状写（黒津舟神社文書）」には「能瀬村」の地名がみえる。

能瀬川と舟橋川の間に位置する低丘陵はその先端で掌状に多方向に尾根を張り出すが、調査地はそのひとつ、最高所標高52ｍ地点から北西に向かい南西に下る長さ200ｍほどの尾根先端部にあたり、調査区域で標高23 ～ 31ｍ、丘陵裾の平地で標高12 ～ 15ｍを測る。尾根上から南方への展望は極めてよく、河北潟干拓地越しに内灘砂丘や金沢平野を見晴らすことができ、北方に向けては、樹高がもう少し低ければ能瀬川流域に展開する能瀬集落や潟縁を能登に向かう能登街道、宝達丘陵が一望されたことであろう。

第２節　歴 史 的 環 境

調査地周辺において遺跡は丘陵部やその間の谷底平野、丘陵裾から河北潟に面した低地部に多く分布する。以下概観すると、町内において**旧石器時代**の遺跡は現在のところ確認されていない。**縄文時代**では丘陵奥部で中期の刈安・上野堂畑遺跡や相窪遺跡、竹橋油木谷遺跡が、河北潟を望む丘陵上では中期中葉の上山田貝塚（３、国指定史跡）や落とし穴が検出された谷内石山遺跡（27）がある。後期以



第４図　能瀬南Ｂ遺跡と周辺の遺跡

降では丘陵奥で能瀬クサヤマＡ遺跡(42)、能瀬クサヤマＢ遺跡(43)、丘陵裾部で指江遺跡(12)、指江Ｂ遺跡(13)のほか、加茂遺跡(38)では中期～晩期の谷川を検出し杭列や木組み遺構、晩期の貯蔵穴を確認している。**弥生時代**では､前･中期は希薄である。その中で加茂遺跡で前期末～中期の平地式建物や土坑、水場遺構、水田などを確認した。舟橋川流域に位置する加茂遺跡では最大で６面の生活面を確認しており、調査地周辺の低地部にはさらに遺跡が埋没している可能性がある。続く後期～古墳時代前期にかけては多くの遺跡が営まれる。かほく市の鉢伏茶臼山遺跡では高地性集落が確認され、上山田遺跡、加茂Ａ遺跡(37)、加賀爪遺跡(51)のほか、指江ジュウサンザカ遺跡(16)では標高約45ｍの丘陵頂部で後期後葉の竪穴建物２棟や土坑、区画溝が、谷内石山遺跡でも標高約30ｍの尾根先端部で竪穴建物４棟や環濠が確認されている。**古墳時代**では能瀬川流域の丘陵部で多数の古墳・横穴墓群が形成される。発掘例は少なく内容不詳のものが多いが、右岸では４世紀代とみられる御門Ａ古墳群(23)、方墳からなる御門Ｂ古墳群(24)、時期は確定されていないが多田西ケ峰横穴(22)が、左岸では谷内石山古墳群(29)、能瀬石山古墳群(30)、谷内横穴群(31)などがある。指江古墳(15)は直径12ｍの単独墳である。また、近年、須恵器窯が相次いで発見された。加茂窯跡群(36)では能瀬南Ｂ遺跡の立地する丘陵斜面で7世紀第２四半期頃の須恵器窯２基が、その1.4㎞北に位置する多田ツルガタン遺跡(17)では窯体は未発見だが、溶着したりゆがみの大きい窯からの流出品とみられる７世紀第２～第３四半期ごろの須恵器片が多数出土した。これら須恵器窯の成立には、古墳時代後期から平安時代にかけてに盛期を持つ加茂遺跡(国指定史跡、掘立柱建物群、北陸道、運河とみられる大溝、加賀郡牓示札などを検出、古代の官衙跡とされる)や隣接する能瀬南遺跡(34)、指江Ｂ遺跡(地方豪族の拠点とされ、多数の墨書土器や木製品、祭祀関連遺物が出土)などの関与が大いに推測されるものである。また**古代**では領家指江ハシバ遺跡(19)、加茂遺跡と重複する加茂廃寺遺跡(38)のほか能登に向かう街道沿いに多くの遺跡が形成され、加茂遺跡、指江遺跡(12)、指江Ｂ遺跡、領家遺跡(20)、御門遺跡(25)、御門ジャモチ遺跡(26)、能瀬南遺跡、五月田遺跡(45)などは中世まで継続する。**中世**では森城跡(４)、上山田城跡(５)、多田城跡(21)、津幡城跡(48)などの中世城館や英田弘済寺跡(18)、多田中世塚(14)が築かれる。また、近年、津幡の市街地では源平合戦で木曽義仲軍に加わった有力者、津波田氏の居館跡とみられる清水遺跡(47)が調査され、街道沿いの要衝地としてあった津幡周辺の状況が明らかとなってきている。

番号	遺　跡　名	所在地	時代	種別
1	御子田遺跡	かほく市森	弥生､古代､中世	集落
2	森ガッコウ遺跡	かほく市森	古代	集落
3	上山田貝塚	かほく市上山田	縄文	集落
4	森城跡	かほく市森	中世	城館
5	上山田城跡	かほく市上山田	中世	城館
6	上山田鳶山遺跡	かほく市上山田	弥生､古墳	集落
7	上山田東田遺跡	かほく市上山田	中世	散布地
8	上山田和田遺跡	かほく市上山田	古墳	散布地
9	上山田遺跡	かほく市上山田	古墳	散布地
10	指江大堤北遺跡	かほく市指江	弥生	散布地
11	狩鹿野八幡神社裏遺跡	かほく市狩鹿野	古墳	散布地
12	指江遺跡	かほく市指江	古代	散布地
13	指江Ｂ遺跡	かほく市指江 津幡町領家	縄文～中世	散布地
14	多田中世塚	かほく市多田	中世	塚
15	指江古墳	かほく市指江	古墳	古墳
16	指江ジュウサンザカ遺跡	かほく市指江	弥生	集落
17	多田ツルガタン遺跡	かほく市多田	古墳､中世	散布地､集落
18	英田広済寺跡	かほく市多田 津幡町領家	中世	社寺
19	領家指江ハシバ遺跡	津幡町領家 かほく市指江	古代､中世	散布地
20	領家遺跡	津幡町領家	古代､中世	散布地
21	多田城跡	かほく市多田	中世	城館
22	多田西ケ峰横穴	かほく市多田	古墳	横穴墓
23	御門Ａ古墳群	津幡町御門	古墳	古墳
24	御門Ｂ古墳群	津幡町御門	古墳	古墳

番号	遺　跡　名	所在地	時代	種別
25	御門遺跡	津幡町御門	古代､中世	散布地
26	御門ジャモチ遺跡	津幡町御門	古代､中世	散布地
27	谷内石山遺跡	津幡町谷内	縄文､弥生､古代	集落
28	能瀬イシヤマ遺跡	津幡町能瀬	縄文	散布地
29	谷内石山古墳群	津幡町谷内	古墳	古墳
30	能瀬石山古墳	津幡町能瀬	古墳	古墳
31	谷内横穴群	津幡町谷内	古墳	横穴墓
32	能瀬遺跡	津幡町能瀬	弥生～古代	散布地
33	能瀬神社遺跡	津幡町表能瀬	中世	散布地
34	能瀬南遺跡	津幡町能瀬	古墳～中世	集落
35	**能瀬南Ｂ遺跡**	**津幡町能瀬**	**弥生**	**集落**
36	加茂窯跡群	津幡町加茂･能瀬	古墳	生産遺跡
37	加茂Ａ遺跡	津幡町加茂	弥生･古墳	集落
38	加茂遺跡、加茂廃寺遺跡	津幡町加茂･舟橋･能瀬	弥生～中世	集落､寺院跡
39	加茂明神遺跡	津幡町加茂	古墳	散布地
40	加茂ツチグラ遺跡	津幡町加茂	古墳	集落
41	加茂ヒャクハチジュウワリ遺跡	津幡町加茂	弥生	集落
42	能瀬クサヤマＡ遺跡	津幡町能瀬	縄文	散布地
43	能瀬クサヤマＢ遺跡	津幡町能瀬	縄文､古代､中世	散布地
44	加茂奥宮遺跡	津幡町加茂	古墳	散布地
45	五月田遺跡	津幡町五月田	古代､中世	散布地
46	庄住吉神社遺跡	津幡町庄	弥生	散布地
47	清水遺跡	津幡町清水町	弥生､中世	集落
48	津幡城跡	津幡町清水	中世､近世	城館
49	津幡スワヤマ遺跡	津幡町津幡	古墳	散布地
50	津幡遺跡	津幡町津幡	古墳	散布地
51	加賀爪遺跡	津幡町加賀爪	古墳	散布地

第１表　周辺の遺跡一覧表

第３章　調 査 の 結 果

第１節　概　　要

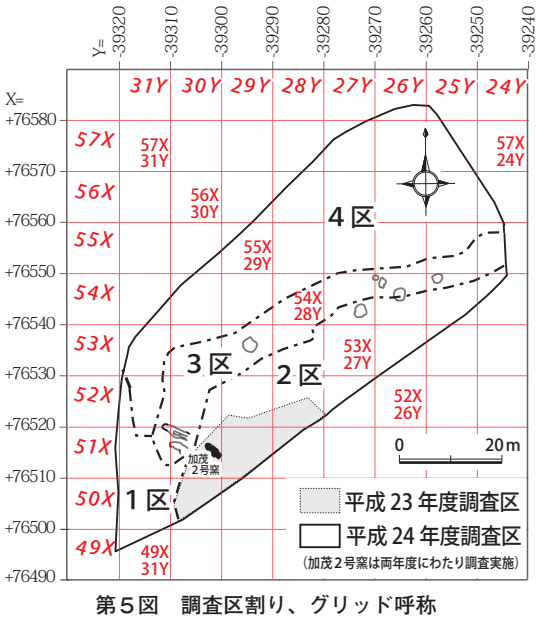
１　概　　要（第９図）

調査区域は幅約40ｍ、延長約100ｍの丘陵先端部全域である。調査の結果、丘陵尾根上部（３区）と南東側斜面上部（２区東半部上部）で弥生時代後期後葉～終末期の大型円筒形土坑３基、小型土坑４基、区画状の溝２条を、丘陵先端部の南東側斜面中ほど（２区西半部）では７世紀第２四半期頃の須恵器窯（加茂２号窯）１基を確認した。遺物はコンテナにして１箱の弥生土器と数点の須恵器片や窯体片、中世土師器片が出土した。調査前には、尾根上部では弥生墳丘墓が、緩傾斜をなす北西側斜面（４区）では須恵器窯の存在が予想されたが遺構・遺物は確認されなかった。また、調査前、丘陵先端上部の延長約30ｍには渡辺家累代の墓所が置かれており、その造営の中で平坦地化されていた。なお、能瀬村に居をおき、近世において十数カ村を束ねた十村（他藩の大庄屋に相当）役を代々勤めた渡辺家は、河北郡十村中でも筆頭の家柄であった。その墓所は調査時には丘陵奥に移転・改葬されていたが、一部、近世の所産とみられる墓坑下部が残っており、これらについてはトレンチ調査により遺構の重複の有無等を確認した。また、墓所にともなう片付け穴１基（ＳＫ02）を検出したほか、南東側斜面表土中には墓所から投棄あるいは転落したとみられる近世以降の土師器皿や香炉、花瓶などの陶磁器製供献具、墓所に置かれた小屋の瓦などコンテナにして７箱が出土している。

２　調 査 区 割 り（第５図）

調査原因となった道路改築事業にかかっては、能瀬南Ｂ遺跡の南側に位置する加茂遺跡において平成17年度より発掘が着手され、平成23年度までの７ヵ年にわたり継続実施されている。これに続く能瀬南Ｂ遺跡の調査に際しては、同様に調査区全体に平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）に合わせた一辺10ｍのグリッドをかけ、グリッド呼称は加茂遺跡と一連のものとした。その基点は南東隅にあり、呼称は東西帯をＸ、南北帯はＹとし、基点グリッド「１Ｘ１Ｙ」からそれぞれ10ｍ毎に１ずつ増加させたものである。能瀬南Ｂ遺跡は49Ｘ30Ｙ区～58Ｘ27Ｙ区までが調査区域にかかる。

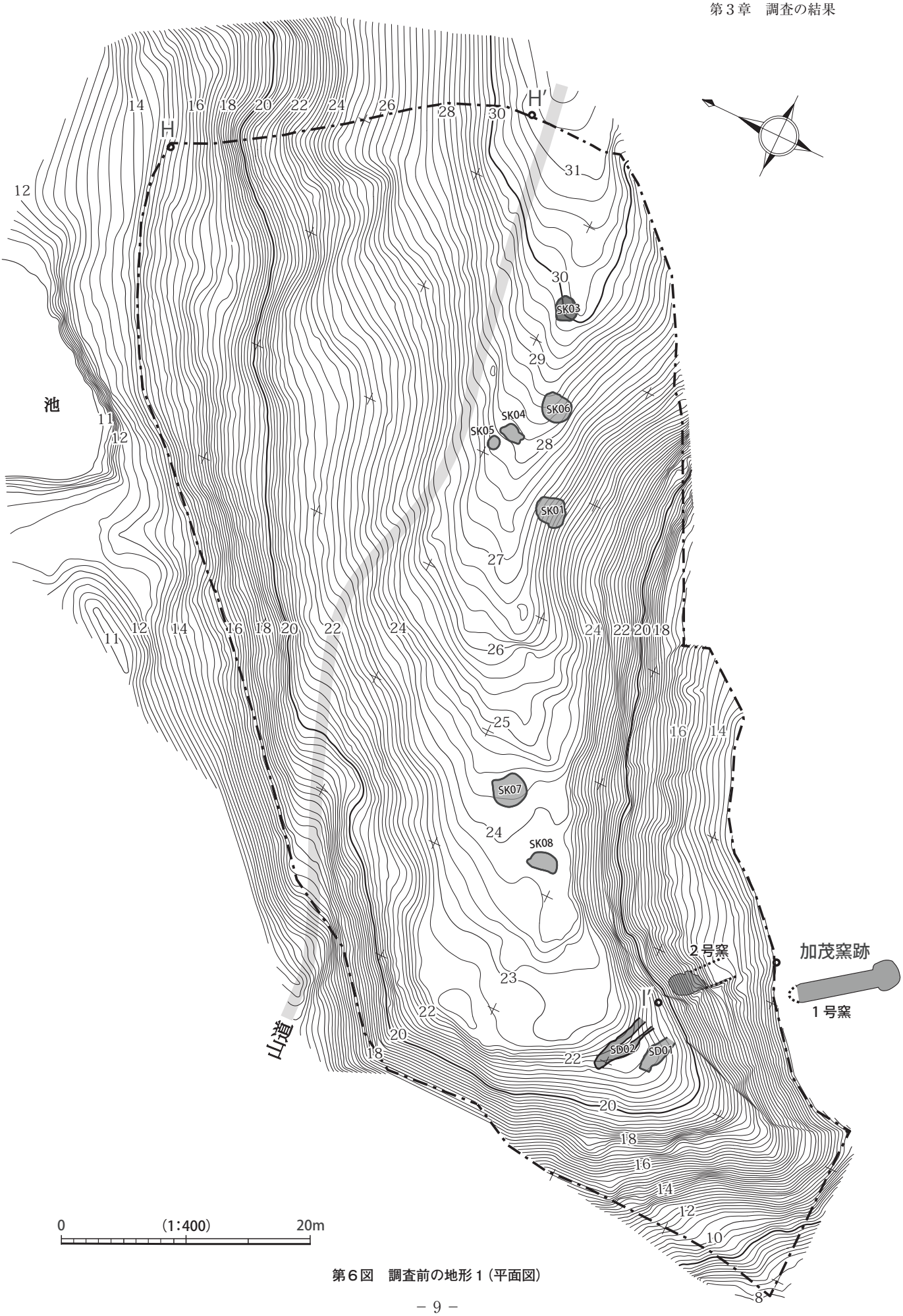
また、第１章第２節で記したように、丘陵上の立木伐採・搬出経路や発掘排土置き場の確保等のため調査区は大きく、１区：南西斜面、２区：南東斜面、３区：丘陵上部、４区：北側斜面に大別し１区から順に調査を進めた。



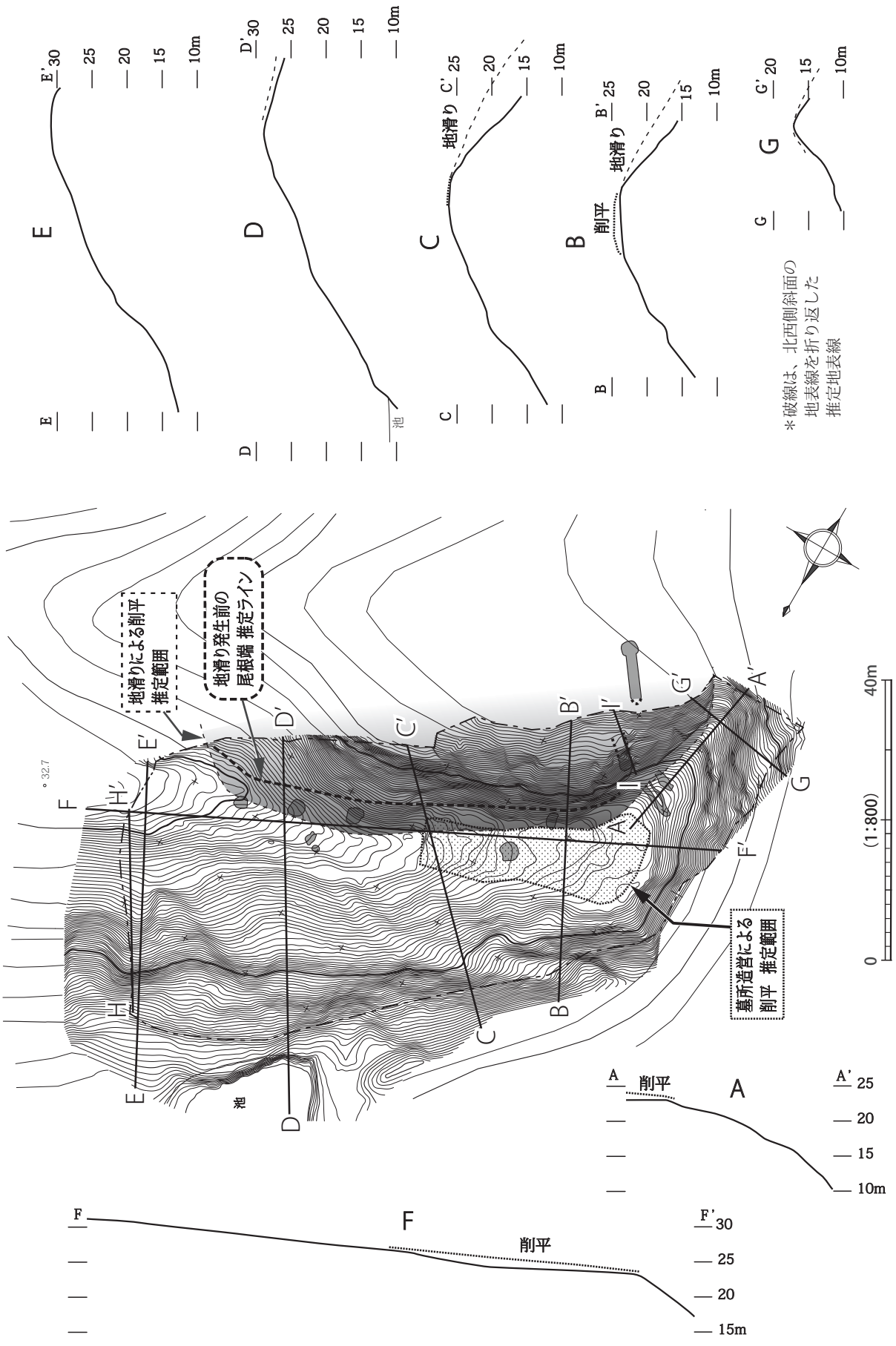
第５図　調査区割り、グリッド呼称

３　調査地の地形と堆積土壌（第６～８・19・20図）

調査対象となった丘陵は北東から南西に緩く下り、尾根上部幅６～10ｍ、調査区域で標高23～31ｍ、

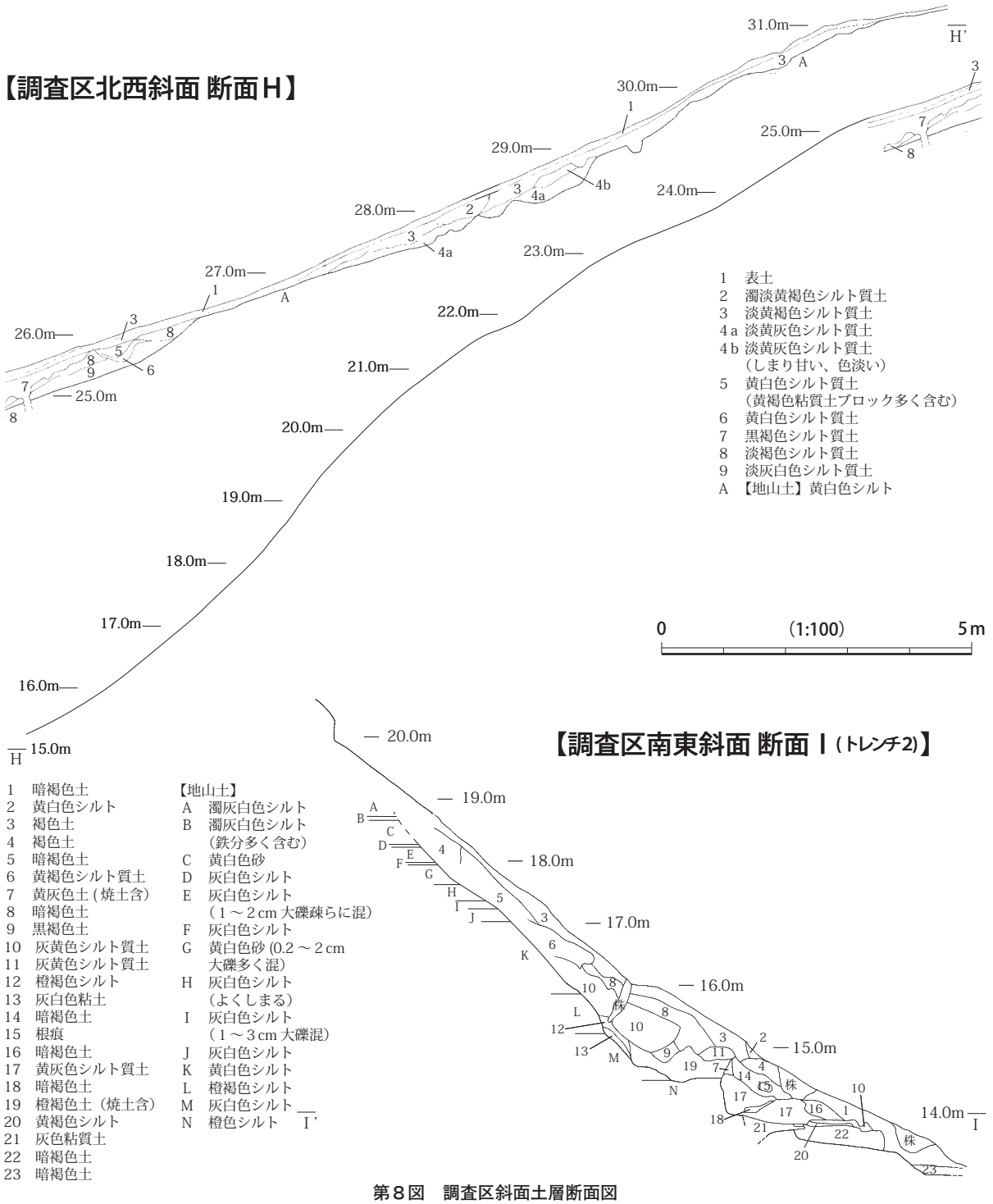


第６図　調査前の地形１（平面図）



第７図　調査前の地形２（エレベーション、地すべり・削平推定範囲）

平地との比高差11 ～ 16ｍを測る。調査前において南西半部は墓所、ほかは山林であり、北西斜面には尾根上の墓地や尾根奥に至る幅２ｍ程の山道が通っていた。各所の地形をみると、尾根先端上部（第７図断面Ｃラインより南西側）は墓所が営まれる過程で幅10ｍほどの平坦面が削り出されており、比較的旧状を残す北東部の尾根形状からみて本来は0.5 ～ １ｍ程度高かったとみられる。斜面部について、北西側斜面（第７図、第８図断面Ｈ）は裾部が崩落により急傾斜をなすほかは、傾斜約25度で下り比較的旧地形を残すとみられる。その中で調査区北端の斜面下半において幅約10ｍのＵ字形凹み（断面Ｈラインがかかる箇所）が認められた。ここに須恵器窯を予想したが、結果的に遺構は存在せず部分的な斜面崩落跡と判断された。この北西側斜面の堆積土（第８図断面Ｈ）は全般に10 ～ 30㎝と薄く、地



第８図　調査区斜面土層断面図

山土：Ａ層(黄白色シルト)と表土：1層間の堆積土２～６・８・９層(明色のシルト質土)の多くは斜面上部からの流出土砂、黒褐色シルトの７層は再堆積した旧表土とみられる。

これに対し南東側斜面(第８・19・20図)は急傾斜をなし、地表で傾斜40～48度を、地山面ではいずれも45度前後を測る。第20図トレンチ１(断面Ｃ)では地表の傾斜が27度と緩いが、これは斜面上部からの滑落土が２ｍあまり堆積していることによるものである。第19・20図の各トレンチ断面で地山層上面のラインをみると、斜面中腹の標高14～16ｍに犬走り状に平坦面(トレンチ1で幅約１ｍ)があり、その上の覆土各層は下から重ねたように、比較的水平に近い堆積をなす。南東側斜面の急崖地形や土壌堆積状況からは、犬走り状の平坦面を地すべり面として、その辺りの地山層が抜けることで斜面全幅に及ぶ大規模な地すべりが発生した状況が推定される。また、地山土について須恵器窯脇に設定した第８図断面Ｉでみると、Ａ～Ｎ層の砂、礫を含んだシルト、シルトなど軟質、硬質の土壌が高さ５ｍほどの間にこまかく互層をなし堆積する状況が認められた。調査中にみた雨天時の表土流出の激しさや、道路工事時の丘陵切り通し断面写真(図版８右下)などからも、遺跡ののる丘陵が脆く崩れやすい土壌からなることが知られたが、第２章で記述した調査地周辺の丘陵地盤の軟弱さがうかがわれ、加茂遺跡における最大６面もの生活面累重の背景を垣間見させるものがある。

第２節　検出遺構・遺物

１　土　　坑

ＳＫ01(第９・11・13図)　２区東部で、３区に接する傾斜50度の斜面上部で検出された。地すべりにより南半を斜めに流失している。本来は尾根上の平坦面に位置した土坑であろう。断面逆台形を呈し、上縁で長径239cm、短径223cm、深さ190cmを測る大型円筒形土坑である。現状の尾根上から約70cm下がった場所に上縁があり、本来の深さは260cm以上であろう。平坦な底面は隅丸長方形を呈し、長径165cm、短径131cm、周縁に幅20cm前後、深さ６～10cmの壁溝を設ける。覆土は深さの割に単純でしまりの甘い各層が水平堆積をなし、短期に埋没あるいは人為的に埋め戻された可能性がある。底面上には開口時に堆積したかとみられる暗色の６層(淡褐色シルト、厚さ約６cm)が堆積する。底面に近い５層を主に弥生時代後期後葉～終末期の土器細片が約40点出土しており、第13図１の蓋、２の高杯脚裾部を図化した。

ＳＫ02(第９・10・13図)　３区南西端、尾根上から南に下る斜面上部に位置しＳＤ02を切る。不整楕円形を呈し、長径229cm、短径163cm、深さ88cmを測る。渡辺家墓所脇に設けられた片付け穴であり、土師器皿(３～８)、骨壺、骨壺蓋(９)、平瓦(10)などが出土している。穴に重複して立木がありその年輪が30本程度を数えたことから、30年前以前の所産といえよう。

ＳＫ03(第９・12・14図)　３区東部の尾根上に位置する。平面隅丸長方形を呈し、上縁で長径196cm、短径166cm、深さ58cmを測る。断面は逆台形を呈する小形土坑である。覆土は２層→３層→１層と土坑縁側から埋没した様相を示す。規模の割に遺物量は多く11～14に示した。11は壺口縁部。12は壺胴下半部で最大径33cmを測る。13の高杯脚部には５個の、14の高杯脚裾部には２個の円孔を穿つ。14の内面外周に沿って煤が付着する。いずれも弥生時代後期後葉の所産とみられる。

ＳＫ04(第９・12・15図)　３区東部の尾根上に位置する小型土坑。北西にＳＫ05が接する。南北に長い不整平面形をなし。長径197cm、短径117cm、深さ30cmを測る。断面は逆台形を呈する。比較的多くの土器が主に１層から出土しており、15～25に示した。23の高杯は脚裾部周縁を赤彩する。いずれも弥生時代後期後葉の所産とみられる。

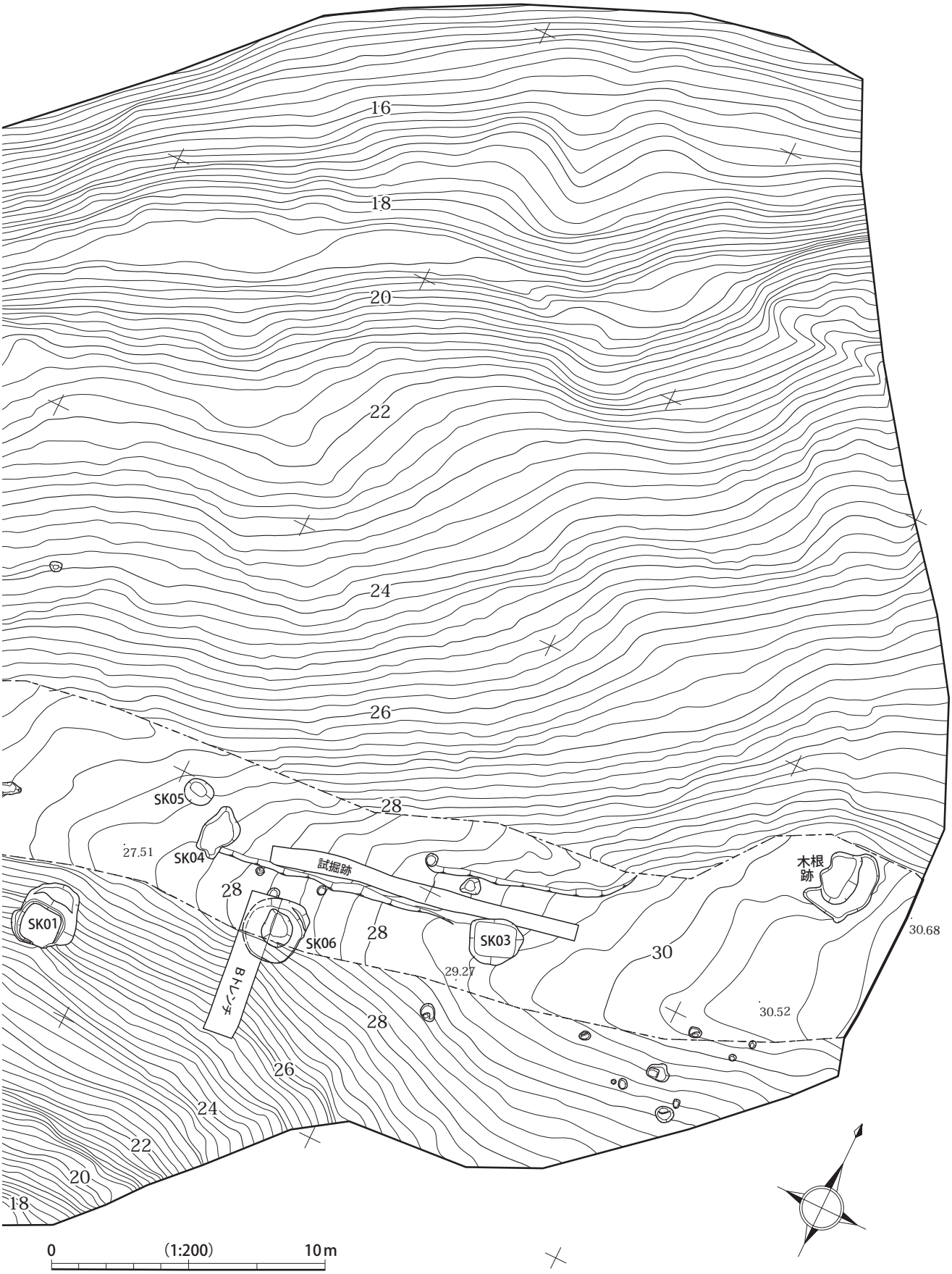
木根
SK03
SK06
SK05
SK04
SK01
墓坑11
墓坑9
墓坑10
墓基壇
墓坑8
SK07
墓坑4
P1
SK08
P2
墓坑6
墓坑2
墓坑3
墓坑1
墓坑7
SK02
SD02
SD01
2号窯
1号窯
撹乱
加茂遺跡F区
加茂遺跡G区
0
(1:400)
20m

第９図　調査区全体図

【平面図 図葉割】

第10図　調査区平面図１

第11図　調査区平面図２



第12図　調査区平面図３

ＳＫ05（第９・12・15図）　３区東部の尾根上に位置する小型土坑。南東にＳＫ04が接する。平面長円形を呈し、長径103cm、短径90cm、深さ26cmを測る。断面椀形を呈する。出土遺物はない。

ＳＫ06（第９・12・16図）　３区東部の尾根上に位置し、南半が２区斜面にかかり斜めに削られる。平面やや不整な円形を呈し、長径246cm、短径220cm、深さ163cmを測る。ＳＫ01・07と同じく大型円筒形土坑であるが、底面中央が窪み、壁溝は設けない。断面形は上部が外開きし、下部は円筒形をなし部分的に外膨れする。土坑縁から埋没していったとみられ、下半の覆土は地山土ブロックを含む土壌が多く人為的に埋め戻された可能性が考慮される。出土遺物はない。

ＳＫ07（第９・11・16図）　３区西部中程の尾根上に位置する。直径260cm前後のやや不整な円形を呈し、深さ130cmを測る大型円筒形土坑である。墓所の中に位置し、上面が50 ～ 100cm程度削平されている可能性がある。壁面はわずかに外傾しながら立ち上がり、オーバーハングする箇所もある。平坦な底面周縁に幅15 ～ 30cm、深さ15cm前後の壁溝を設ける。覆土は深さの割に単純でしまりはやや甘く、短期に埋没あるいは人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は土器細片が約20点出土しており、26の壺、27の壺胴部を図化した。弥生時代後期後葉の所産とみられる。

ＳＫ08（第９・11・17図）　３区東部南側に位置する小型土坑。平面不整長円形、断面逆台形を呈し、長径230cm、短径138cm、深さ50cmを測る。28・29の弥生時代後期後葉とみられる甕、高杯が出土している。

２　溝

ＳＤ01（第９・10・18図）　３区南端、尾根上部から斜面を約５ｍ下った傾斜14度の場所に存在する。等高線に平行し尾根を横断する形で位置することから、尾根上と下を境する区画溝の可能性がある。長さ280cm以上、幅132cm、深さ60cmを測る。溝の南東側延長は地すべりにより削平される。北西側延長も急崖となっており地すべりを被ったとみられるが。周辺地形からみてそう伸びずに途切れていた可能性がある。遺物は伴わず時期は決定できないが、北東１ｍに並走するＳＤ02と関連が考えられる。

ＳＤ02（第９・10・18図）　ＳＤ01の北東側にあって、尾根上部から斜面を約３ｍ下ったより高い場所に並走する。長さ500cm以上、幅150cm、南東部が二分しており、斜面上位のＳＤ02ａは幅66cm、深さ60cmと深く、下位のＳＤ02ｂは幅58cm、深さ16cmと浅い。ＳＤ02ｂの南東側はＳＫ02に削られ、その先は地すべりによって削平される。北西側延長もＳＤ01と同じく状況は不明である。ＳＤ02ａからは弥生時代後期後葉の34の壺、35の台付鉢のほか土器細片約20点が出土している。

３　南東側斜面（２区）

第19・20図には２区にあたる調査区南東側斜面に設定したトレンチ配置図とその断面土層図を、第21 ～ 25図には斜面からの出土遺物を示した。遺物は表土から手堀りで堀り下げた平成23年度調査時に地表で採取あるいは斜面覆土中から出土したものである。38 ～ 41、47 ～ 51の須恵器は７世紀第２四半期に位置付けられ、加茂２号窯に伴うものであろう。43は打製石斧、36、37、45、46は弥生土器、52 ～ 71は近世以降の土師器皿である。合計80枚程が出土しており、多くが灯明皿として使用されている。渡辺家は真宗であり供養の際に用いられたものであろう。その法量は①：口径７～ 7.5cm、器高1.5 ～２cm、②：口径９～ 10cm、器高２～ 2.5cm、③：口径11 ～ 12cm、器高２～ 2.5cmの３法量に大まかに分けられる。72 ～ 74は陶器皿、75・96は骨壺、76はすり鉢、77は徳利、78 ～ 88、90・91は磁器皿・碗・鉢、89は香炉、92は仏飯器、93・94は花瓶である。これら斜面出土遺物は尾根上の弥生集落や墓所から転落したもので、多量に存在した土師器皿などには折々の片づけ等に際し投棄されたものも多いであろう。44の縄文土器も斜面上部で出土しており尾根上からもたらされたとみられる。97 ～ 102

の釉薬瓦はＳＫ02出土品と同じく墓所脇に設置された小屋等に伴うものであろう。

第３節　ま　と　め

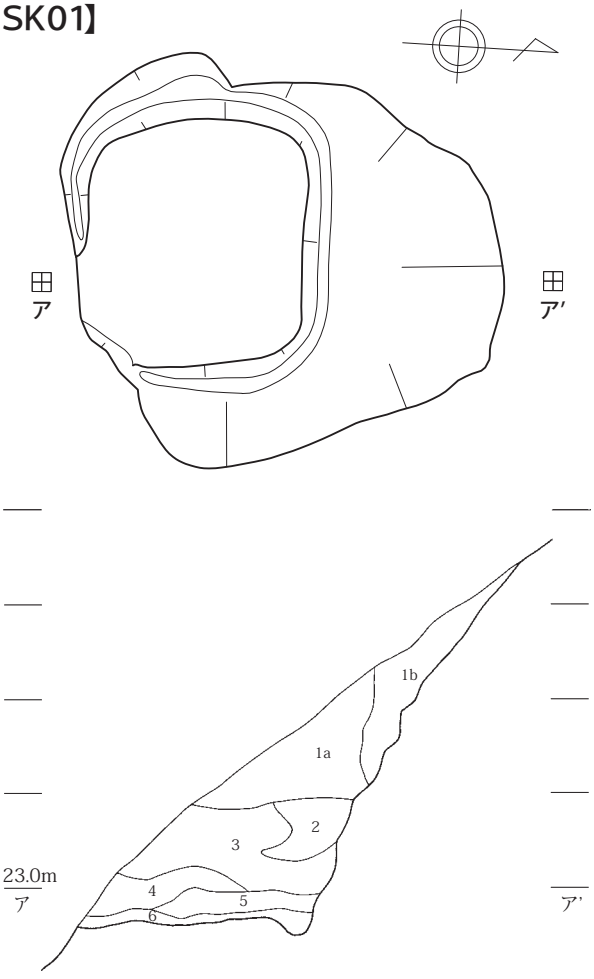
調査の結果、旧河北潟を見晴らす標高23 ～ 31ｍ(平地との比高差11 ～ 16ｍ)の丘陵尾根上に立地する弥生時代後期後葉～終末期の集落跡を確認した。検出遺構(第９図)は、尾根上～南東側斜面で大型の円筒土坑３基(ＳＫ01・06・07)、小型の土坑４基(ＳＫ03 ～ 05・08)、尾根先端部斜面で尾根に直行する区画状の溝２条(ＳＤ01・02)である。南東側斜面ではほかに古墳時代後期の須恵器窯１基(加茂２号窯)を調査したが、これについては、今後刊行予定の『加茂遺跡』報告書に掲載する。

また、遺跡の立地する丘陵について自然・人為により大幅な改変を受けていた(第7図)ことを確認した。そのひとつは丘陵南東側で認められた地すべりである。一時のものか複数回にわたるものかは不明だが、結果的に尾根上部南側と延長約80ｍの南東斜面全幅を滑落させる大規模な自然災害であり、ここに位置した大型土坑ＳＫ01・06は急崖上部で斜めに削られた状態で検出され、斜面中途に築かれた加茂２号窯は窯尻部床面３ｍを残すのみの状態であった。尾根上部の平坦面は現状で幅６～ 10ｍであるが、周辺の地形を考慮すると、地すべり発生以前にはさらに５ｍ程度幅が広かったものと推定される。また、区画状溝が横断する尾根先端部斜面も特に西側が急崖をなし斜面滑落があった可能性が高い。もうひとつの地形改変は尾根先端部上面においてであり、先端から約30ｍ間が近世以降の墓所造営に伴い平坦地化されていた。削平度合いは把握できなかったが周辺地形からみて0.5 ～ １ｍ程度の厚さで削られたものと推定する。

さて、本遺跡並行期において、加賀地域北部の標高20 ～ 60ｍの低丘陵上から丘陵裾の低地部では多数の遺跡が知られるが、その中には遺跡立地や検出遺構からみて、単に台地や丘陵上を占地した一般集落とはできない内容を持つ遺跡が認められる。調査地周辺では、能瀬南Ｂ遺跡の北方約４㎞において、環濠や土塁状遺構などの防御遺構をともないその内外で15棟の竪穴建物や大型土坑を確認した、北陸を代表する高地性集落、鉢伏茶臼山遺跡がある。隣接する低丘陵上の鉢伏カクチ遺跡では、茶臼山に向いた標高約25ｍ(平地との比高差約15ｍ)地点で竪穴建物１基、大型土坑３基、区画溝が、北方約0.8㎞に位置する谷内石山遺跡では、能瀬川流域を望む標高約27ｍ(平地との比高差約20ｍ)の尾根先端で壕や４棟の竪穴建物が確認されている。また、北方約1.5㎞に位置する指江ジュウサンザカ遺跡は、標高約55ｍの丘陵頂部から少し下った標高45ｍ(平地との比高差約35ｍ)地点の約10×20ｍの高まり上で、建て替えを伴う竪穴建物１棟と円筒土坑１基が確認されている。能瀬南Ｂ遺跡での弥生期の営みは、上述の地すべりや削平により調査区各所が旧状を失った状況にあって十分に復元し得ないが、検出した土坑や溝からは細片ながら各10数点の土器が出土しており、一定規模の活動があったことがうかがわれる。その中心としては比較的幅を持つ尾根先端部、墓所に重なるＳＫ07周辺が想定され、削平を被った竪穴建物の存在も考えうる。ただ、最大に見積もっても幅15ｍ程度の痩せ尾根上であり同時存在はせいぜい２・３棟であろう。こうした想定において、先に挙げた遺跡のなかでは、開けた眺望と外部から独立した小規模な遺構構成をもつという点において谷内石山遺跡や指江ジュウサンザカ遺跡に本遺跡との類似性をうかがう。資料の増加に期待したいが、眼下の加茂遺跡では平地式建物や掘立柱建物を伴う同時期の集落が確認されていることからみて、能瀬南Ｂ遺跡の検出遺構については、恒常的集落ではなく、加茂集落を拠点としこれに付随する施設群であり、その性格としては、高所からの監視あるいは周辺集落との通信的性格を担った可能性を指摘しておきたい。

最後に、丘陵南東側の地すべりの発生時期についてみてみたい。丘陵南側の低地部では弥生時代か

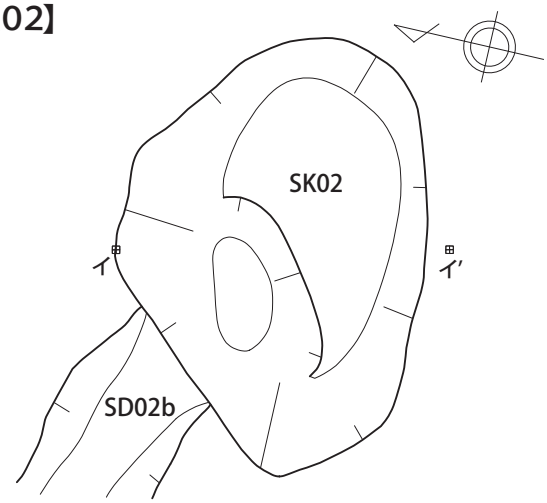
【SK01】

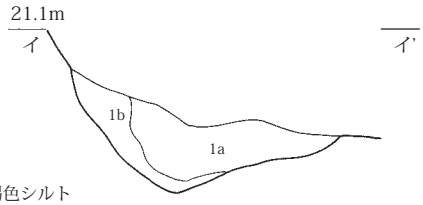


1 a 淡黄褐色細砂
1 b 淡黄褐色細砂
2　淡黄褐色シルト（黄白色シルト、地山土ブロック少量含む）
3　黄褐色細砂
4　灰褐色シルト
5　明黄褐色粘質土（４層ブロック少量含む）
6　淡褐色シルト

0　(1:40)　2m

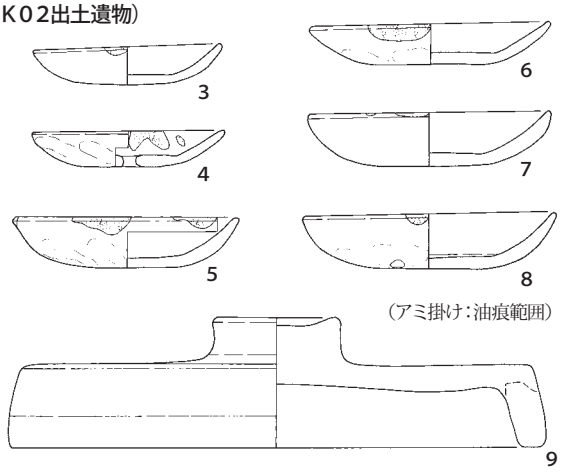
【SK02】



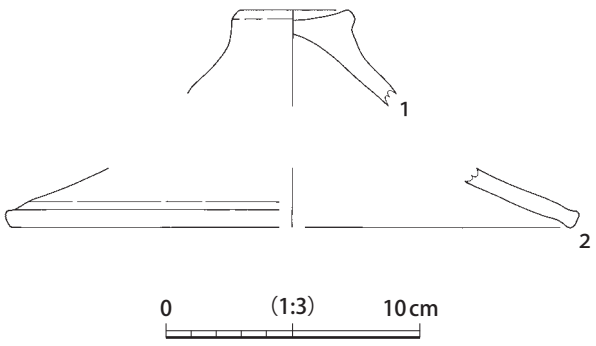


1 a 淡褐色シルト
1 b 淡褐色シルト（色淡い）

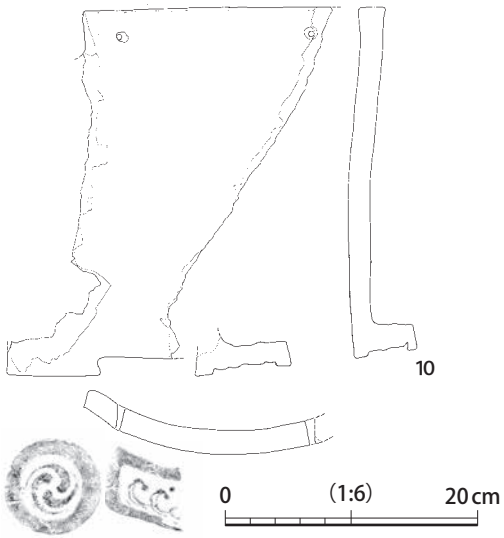
（SK02出土遺物）



（SK01出土遺物）



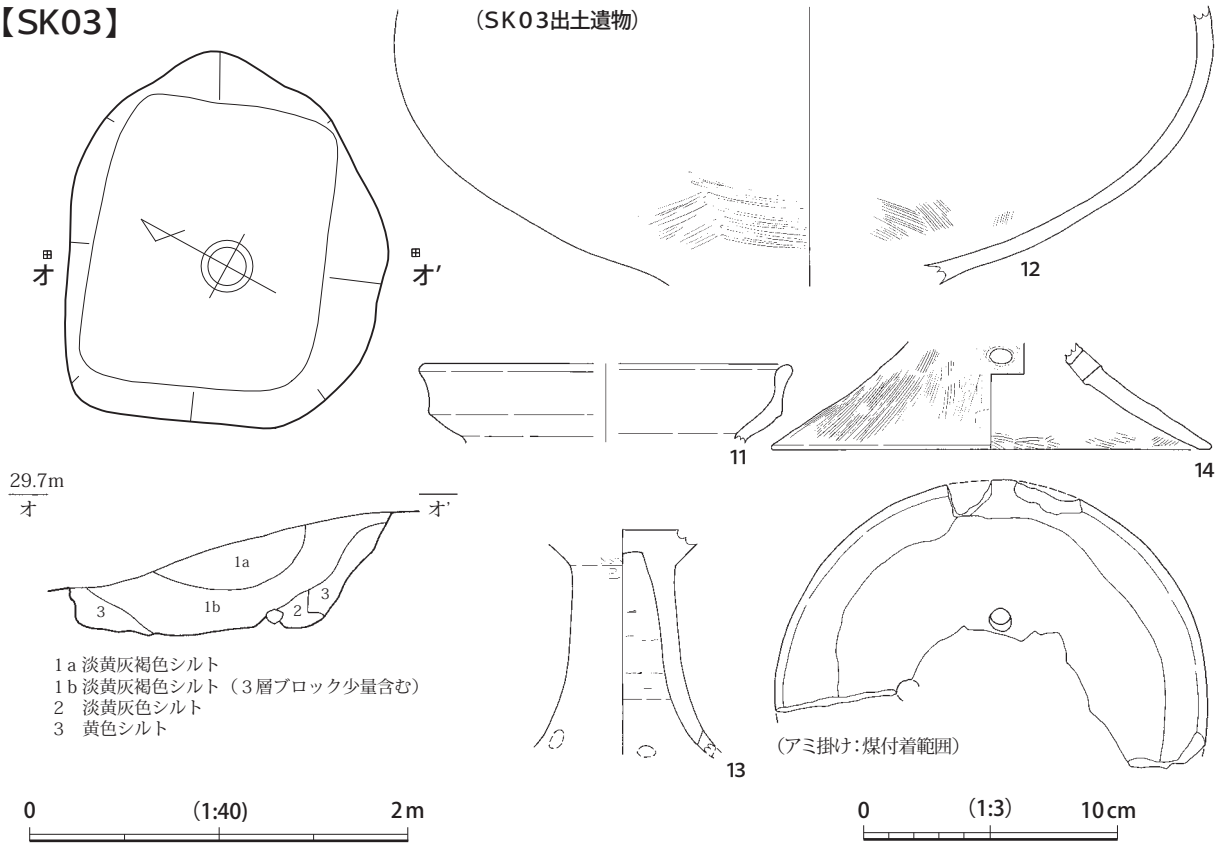
0　(1:3)　10cm



0　(1:6)　20cm

（縮尺　遺構 1/40、遺物 1～9：1/3、10：1/6）

第13図　検出遺構・遺物１（SK01・02）



第14図　検出遺構・遺物2（SK03）　（縮尺　遺構 1/40、遺物 1/3）

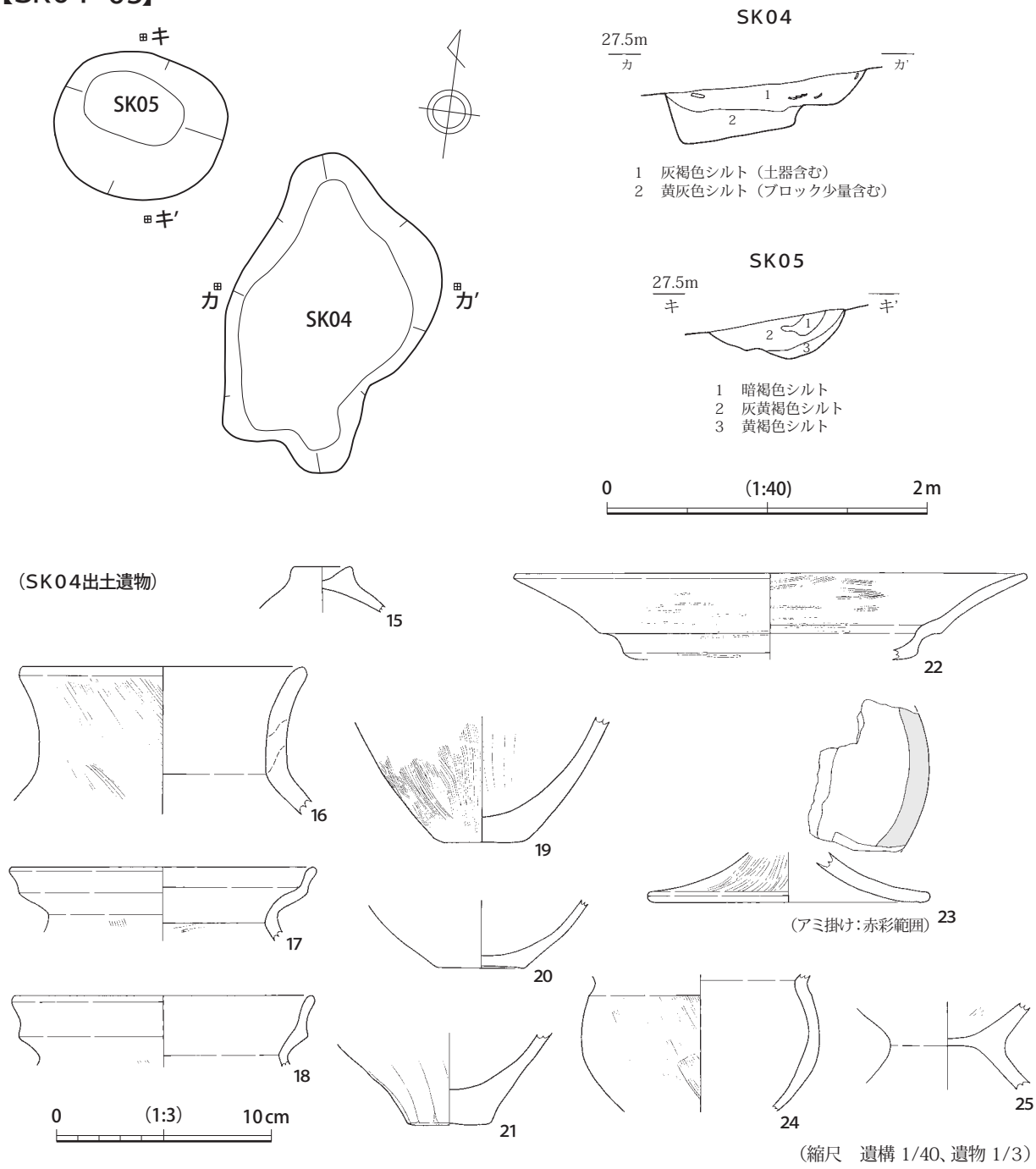
ら中世までほぼ連綿と加茂遺跡（第２図）が営まれる。その中で、能瀬南Ｂ遺跡に接する丘陵南裾から約40ｍ間（加茂遺跡Ｆ・Ｇ区（第９図右下））においては、７世紀第２四半期の須恵器窯（加茂１号窯）操業の後、13世紀代に地すべり土を整地した上に掘立柱建物が設けられるまで活動は希薄となる。一方、丘陵西裾に接し加茂遺跡と継続時期を同じくする能瀬南遺跡ではその間においても遺構が継起する。加茂遺跡Ｆ・Ｇ区の停滞の背景には地すべりの影響が思料されるものであり、その発生時期については早ければ７世紀後半、遅くとも古代の間を推定したい。広範囲に調査が実施された加茂遺跡では縄文時代以降、最大６面の生活面が確認されており、その概報でも指摘されている（安2007）が、当地においては河川による土砂流入とともに、周囲の丘陵部からの流出土砂も生活面累重の要因として留意されよう。特に、能瀬南Ｂ遺跡の地すべりは非常に大規模な自然災害であり、古代加茂遺跡の運営に少なからぬ影響を与えたと思われる。流出した加茂窯の窯体や須恵器などは加茂遺跡の発掘調査ではあまり確認されていないが、その残骸は調査区域外に流出したほか、加茂遺跡の古代・中世あるいはその後の営みの過程で片付けられた可能性がある。

参　考　文　献

宇ノ気町史編纂委員会　1970 『石川県宇ノ気町史』 宇ノ気町教育委員会
津幡町史編纂委員会　1974 『津幡町史』 津幡町役場
紺野義夫　1977 『石川県の自然環境』 石川県
西野秀和ほか　1980 『津幡町谷内石山遺跡』 津幡町教育委員会
角川日本地名大辞典編纂委員会　1981 『角川地名大辞典』17 石川県　㈱角川書店
橋本澄夫　1987 「第５章第３節 加賀・能登における高地性集落遺跡とその時期」『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』 石川県河北郡宇ノ気町教育委員会

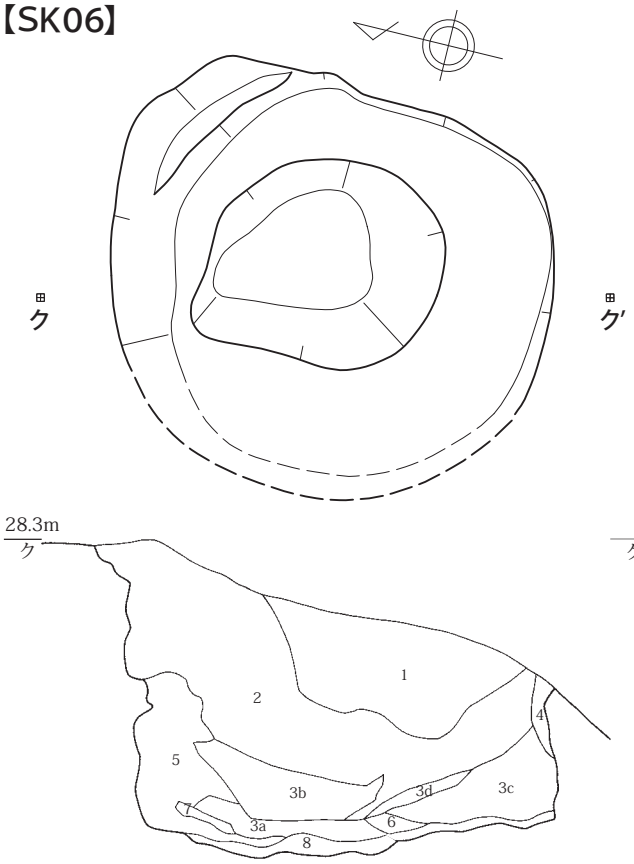
米沢義光ほか　1987 『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』 石川県河北郡宇ノ気町教育委員会
（有）平凡社地方資料センター　1991 『石川県の地名』日本歴史地名大系第 17 巻　株式会社平凡社
三浦純夫ほか　1993 『加茂遺跡』（社）石川県埋蔵文化財保存協会
西野秀和　1999 「第７章　考察」『能美丘陵東遺跡群Ⅴ』（財）石川県埋蔵文化財センター
柴田昌治　2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』第 10 巻弥生・古墳時代 遺跡・遺構　小学館
安　英樹　2007 「加茂遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 18 号 （財）石川県立埋蔵文化財センター
林　大智　2008 『かほく市　鉢伏カクチ遺跡』（財）石川県立埋蔵文化財センター
津幡町教育委員会　2008 『能瀬南遺跡』発掘説明会資料
戸谷邦隆ほか　2009 『加茂・加茂廃寺遺跡』 津幡町教育委員会
浜崎悟司ほか　2009 『津幡町　加茂遺跡Ⅰ』 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
戸谷邦隆ほか　2012 『加茂遺跡』 津幡町教育委員会

【SK04・05】



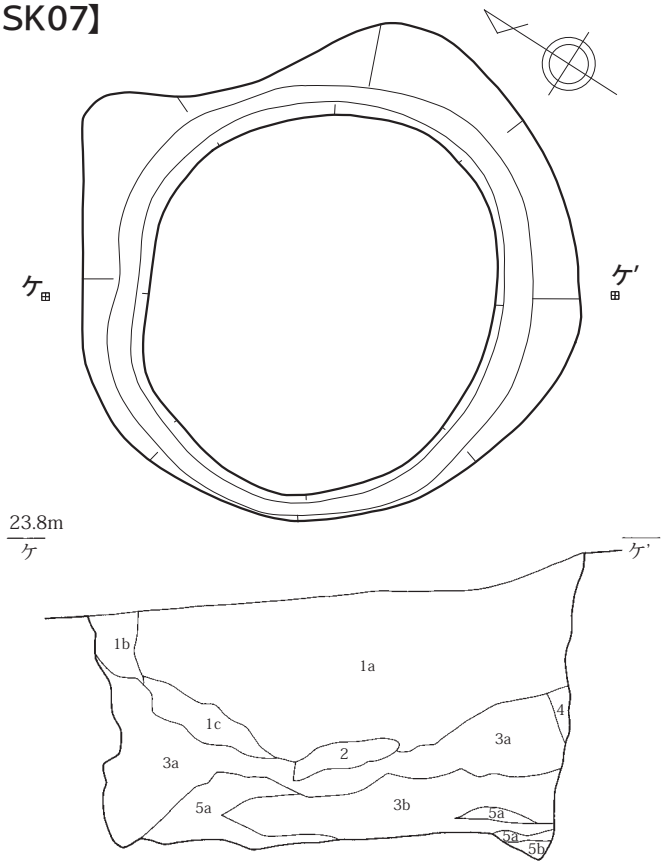
第15図　検出遺構・遺物３（SK04・05）

【SK06】



1　濁黄褐色シルト（粘性あり）
2　淡黄褐色シルト（粘性あり）
3a 明黄褐色シルト
3b 明黄褐色シルト（地山灰白色シルトブロック少量含む）
3c 明黄褐色シルト（地山灰白色シルトブロック多量含む）
3d 明黄褐色シルト（炭粒含む）
4　淡灰白色シルト
5　明黄褐色シルト（地山赤渇色シルトブロック含む）
6　淡灰黄白色シルト
7　淡灰褐色シルト
8　淡灰白色シルト（淡黄褐色シルトブロック含む）

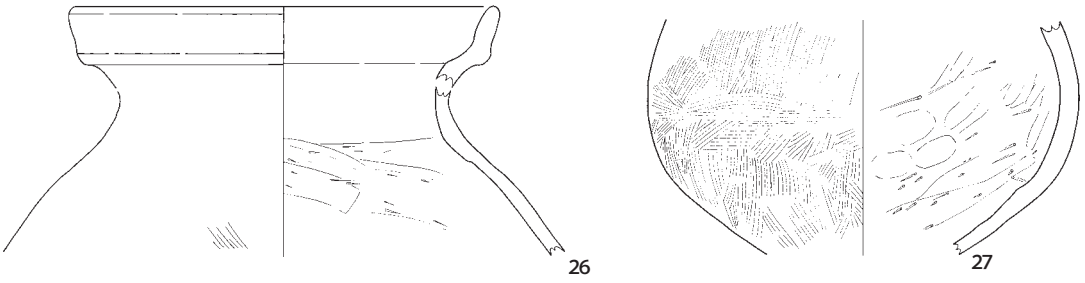
【SK07】



1a 濁黄褐色シルト（粘性あり）
1b 濁黄褐色シルト（1a 層より色暗い、炭粒少量含む）
1c 濁黄褐色シルト（灰褐色粘質土ブロック多量に含む）
2　淡黄褐色シルト
3a 明黄褐色シルト（炭粒少量含む）
3b 明黄褐色シルト（炭粒少量含む、淡褐色シルトブロック含む）
4　灰黄白色シルト
5a 淡黄白色シルト
5b 淡黄白色シルト（淡黄褐色シルトブロック含む）

0　(1:40)　2m

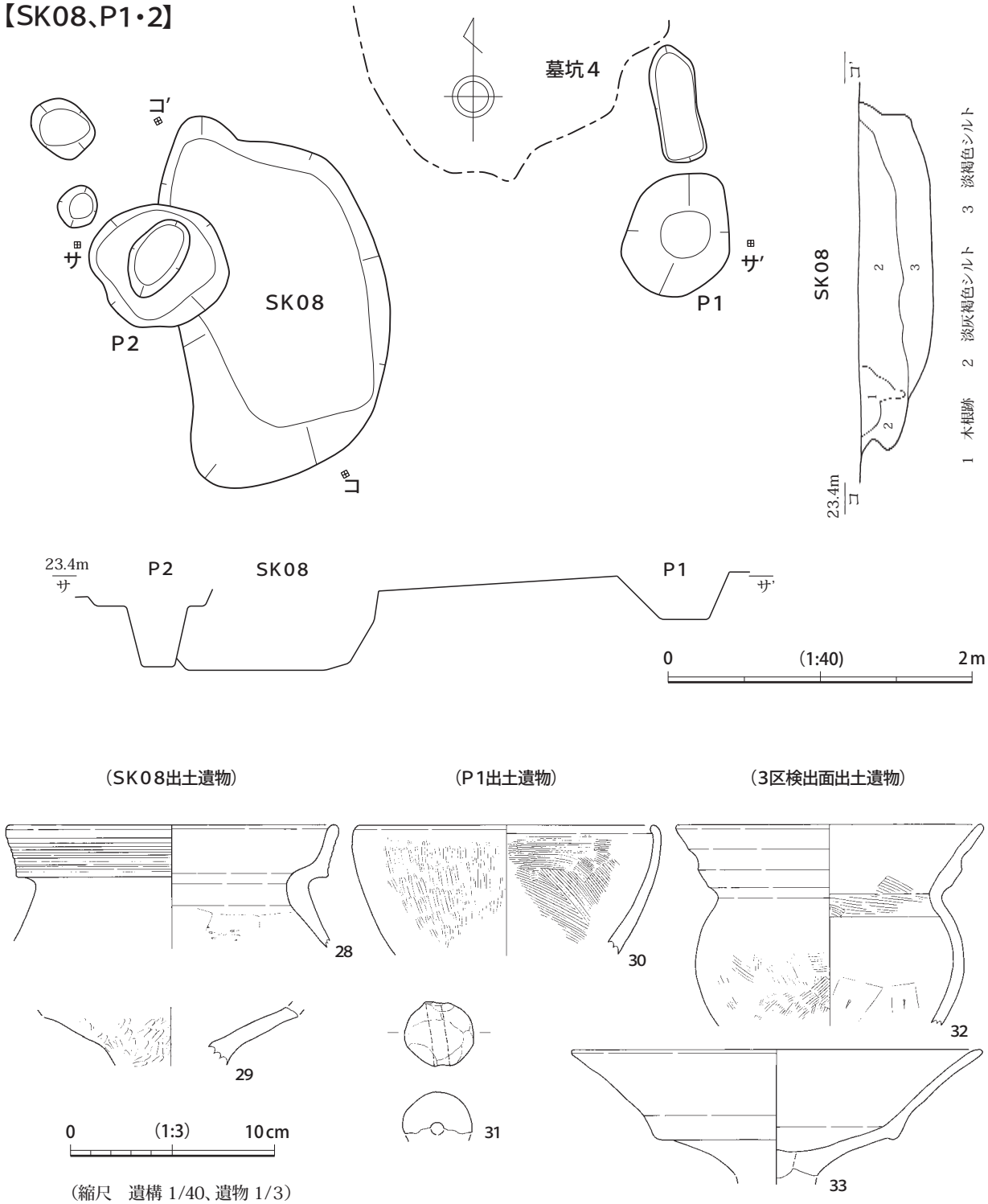
（SK07出土遺物）



0　(1:3)　10cm

（縮尺　遺構 1/40、遺物 1/3）

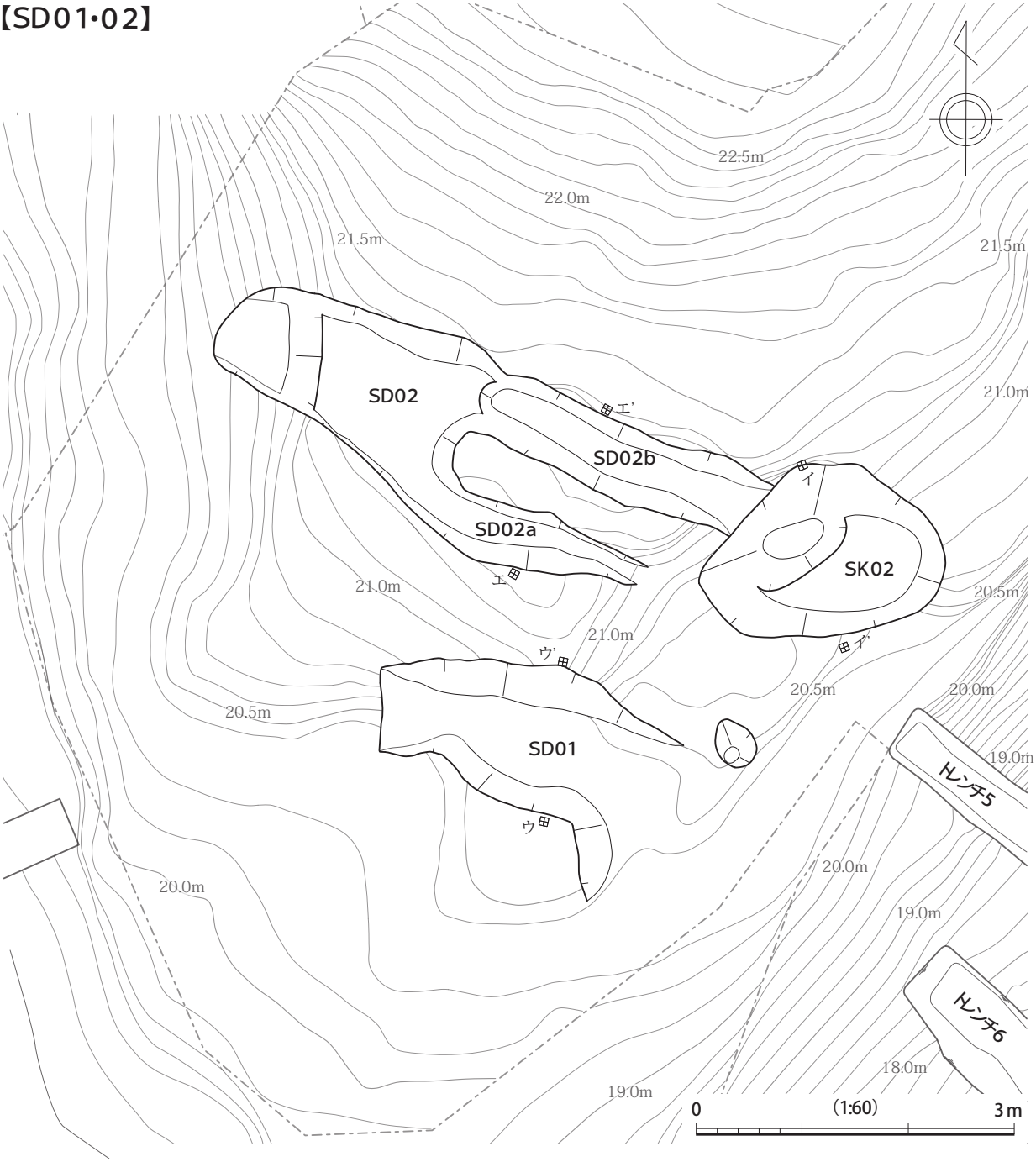
第16図　検出遺構・遺物４（SK06・07）

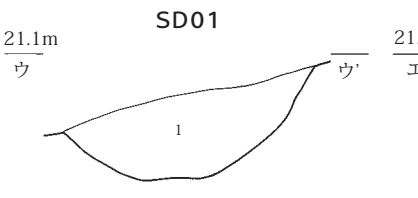


（縮尺　遺構 1/40、遺物 1/3）

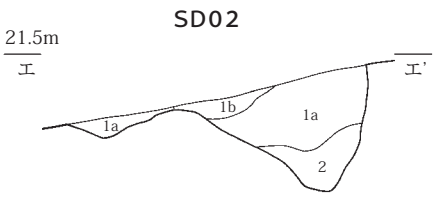
第17図　検出遺構・遺物５（SK08、P1・2）

【SD01･02】



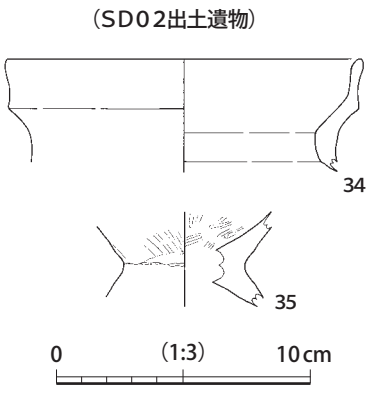


1　淡黄褐色シルト
（明黄褐色地山シルトブロック少量含む）



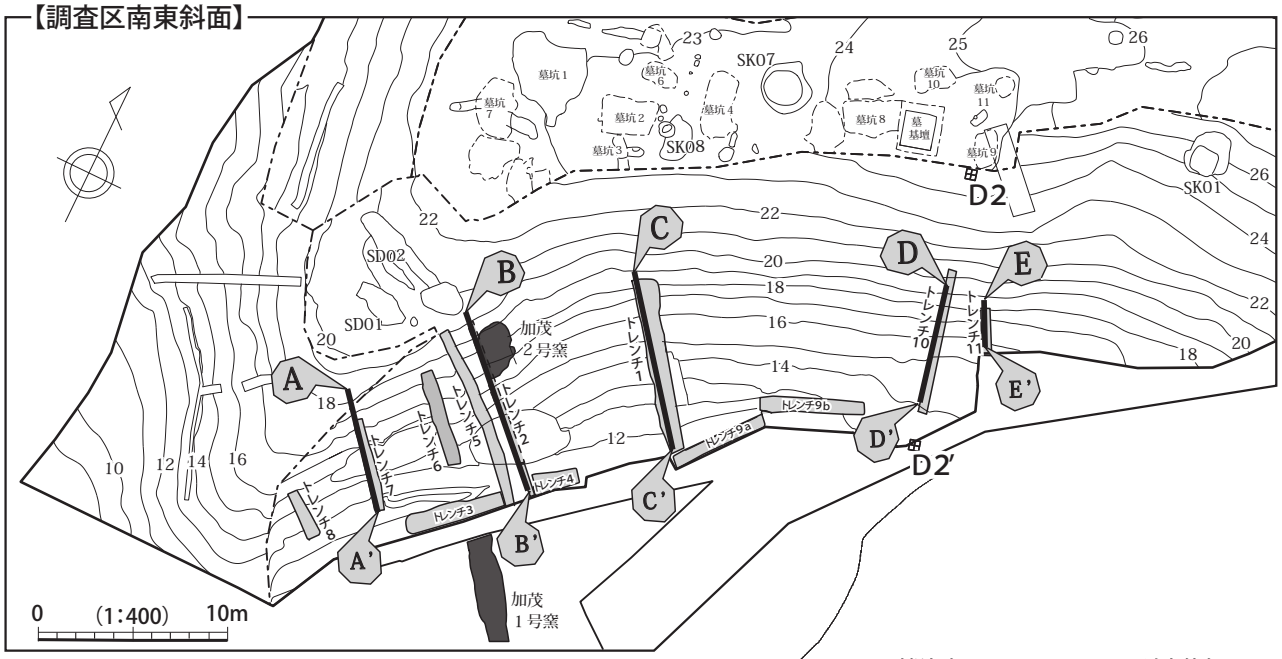
1a 明灰黄褐色シルト
1b 明灰黄褐色シルト
（明黄褐色地山シルトブロック少量含む）
2　明黄褐色シルト

（SD02出土遺物）

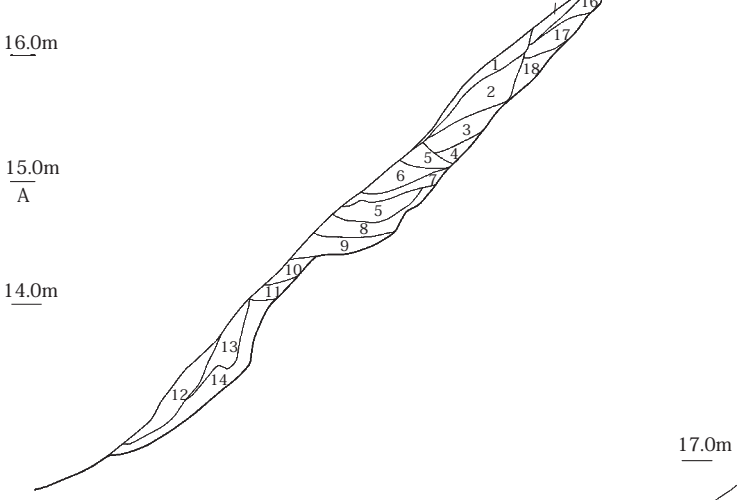


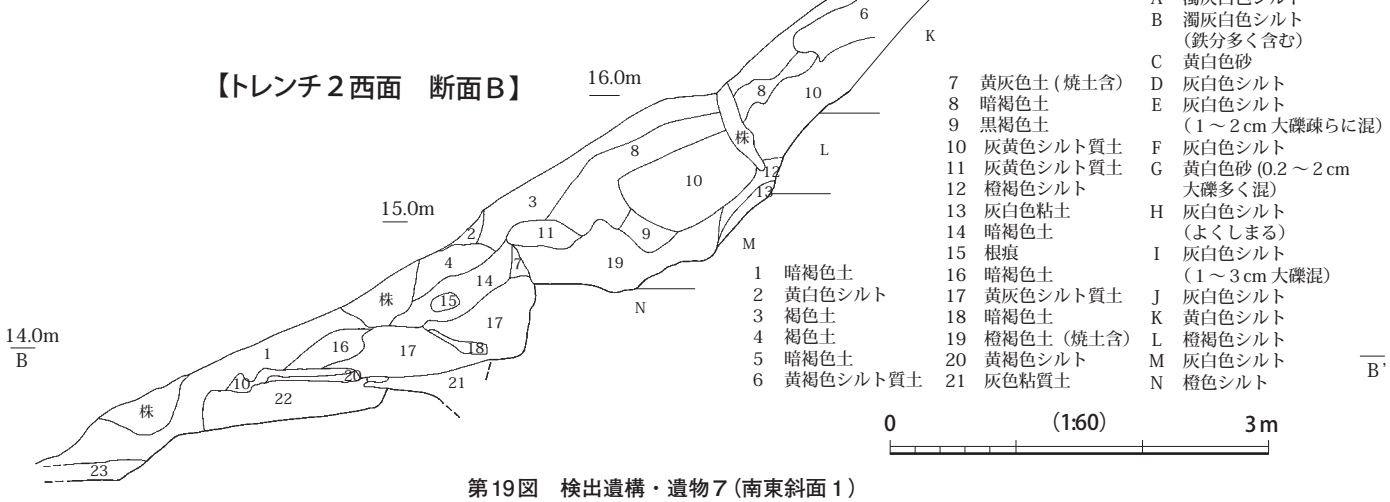
（縮尺　平面図 1/60、断面図 1/40、遺物 1/3）

第18図　検出遺構・遺物6（SD01・02）



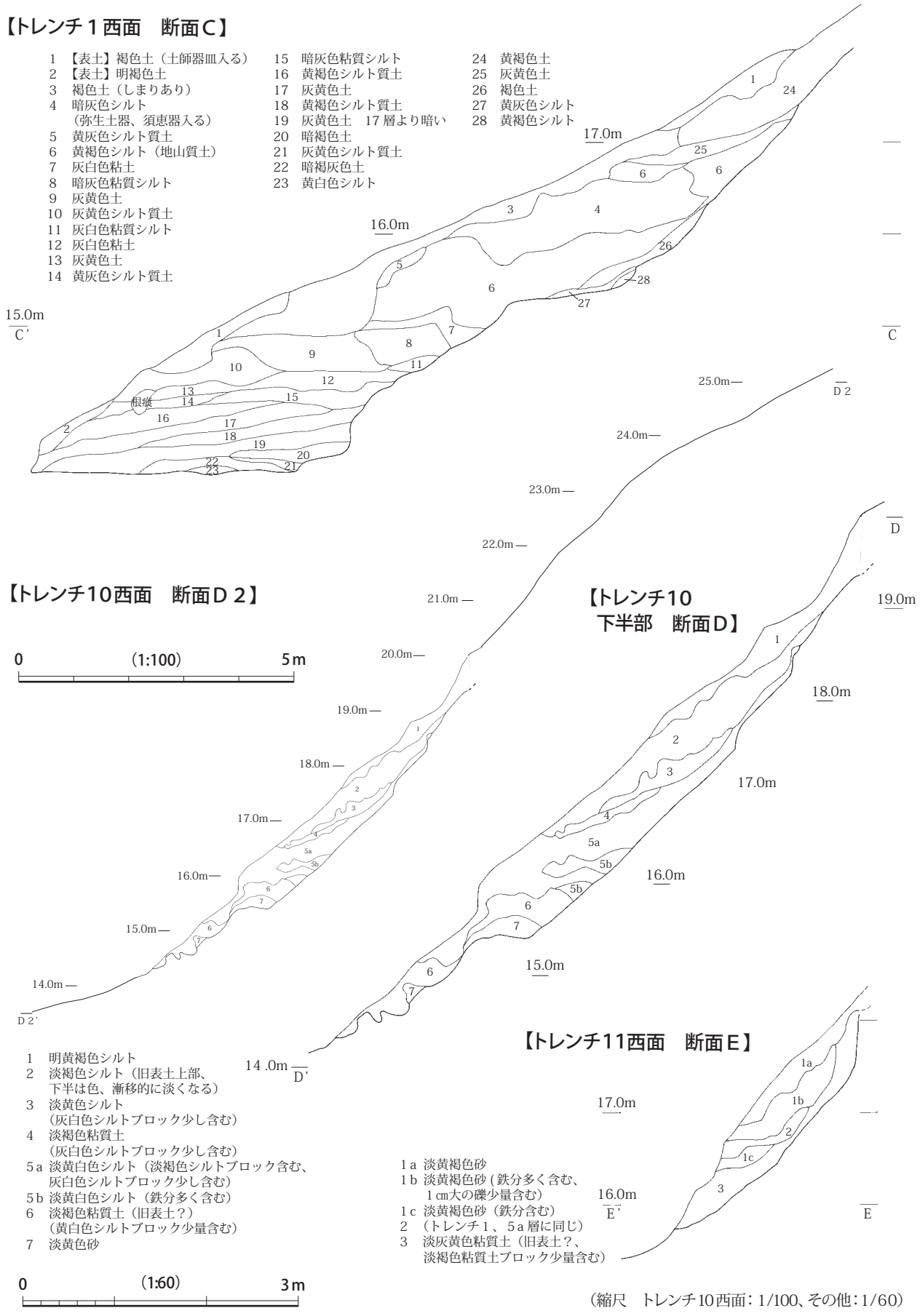
1　暗褐色土
2　黄橙色シルト
3　黄灰色シルト（白色粘土ブロック入る）
4　黄灰色シルト
5　淡褐灰色土
6　黄灰色シルト
7　暗黄橙色シルト
8　暗褐色土
9　黄橙色粘質シルト
10　灰白色粘土
11　黄橙色シルト
12　【表土】暗褐色土
13　淡灰黄色シルト
14　黄橙色シルト
15　灰黄色砂質土
16　褐色砂礫
17　橙褐色シルト
18　灰黄色シルト





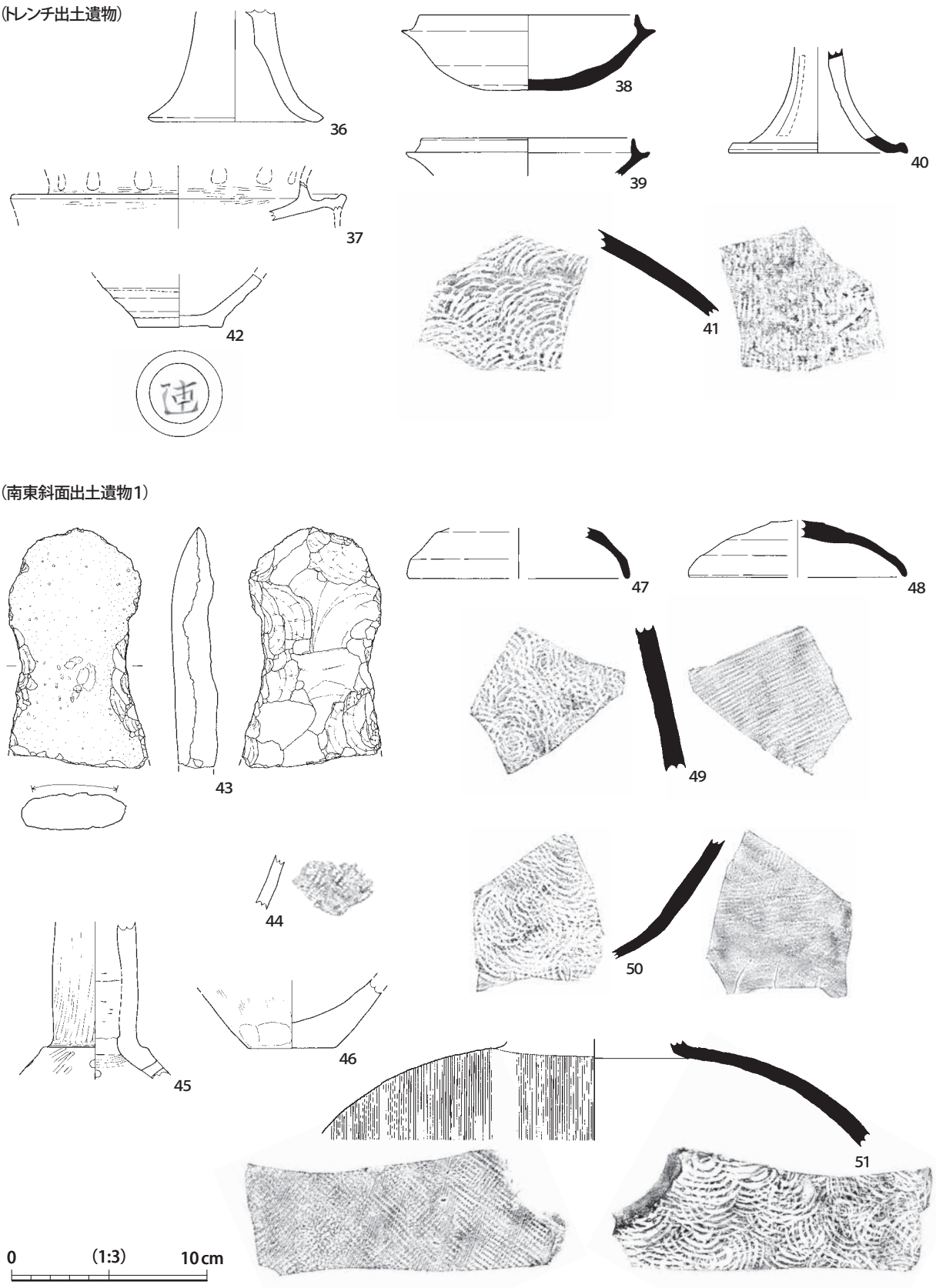
1　暗褐色土
2　黄白色シルト
3　褐色土
4　褐色土
5　暗褐色土
6　黄褐色シルト質土
7　黄灰色土（焼土含）
8　暗褐色土
9　黒褐色土
10　灰黄色シルト質土
11　灰黄色シルト質土
12　橙褐色シルト
13　灰白色粘土
14　暗褐色土
15　根痕
16　暗褐色土
17　黄灰色シルト質土
18　暗褐色土
19　橙褐色土（焼土含）
20　黄褐色シルト
21　灰色粘質土
22　暗褐色土
23　暗褐色土
A　濁灰白色シルト
B　濁灰白色シルト（鉄分多く含む）
C　黄白色砂
D　灰白色シルト
E　灰白色シルト（１～２cm 大礫疎らに混）
F　灰白色シルト
G　黄白色砂 (0.2 ～２cm 大礫多く混）
H　灰白色シルト（よくしまる）
I　灰白色シルト（１～３cm 大礫混）
J　灰白色シルト
K　黄白色シルト
L　橙褐色シルト
M　灰白色シルト
N　橙色シルト

第19図　検出遺構・遺物７（南東斜面１）

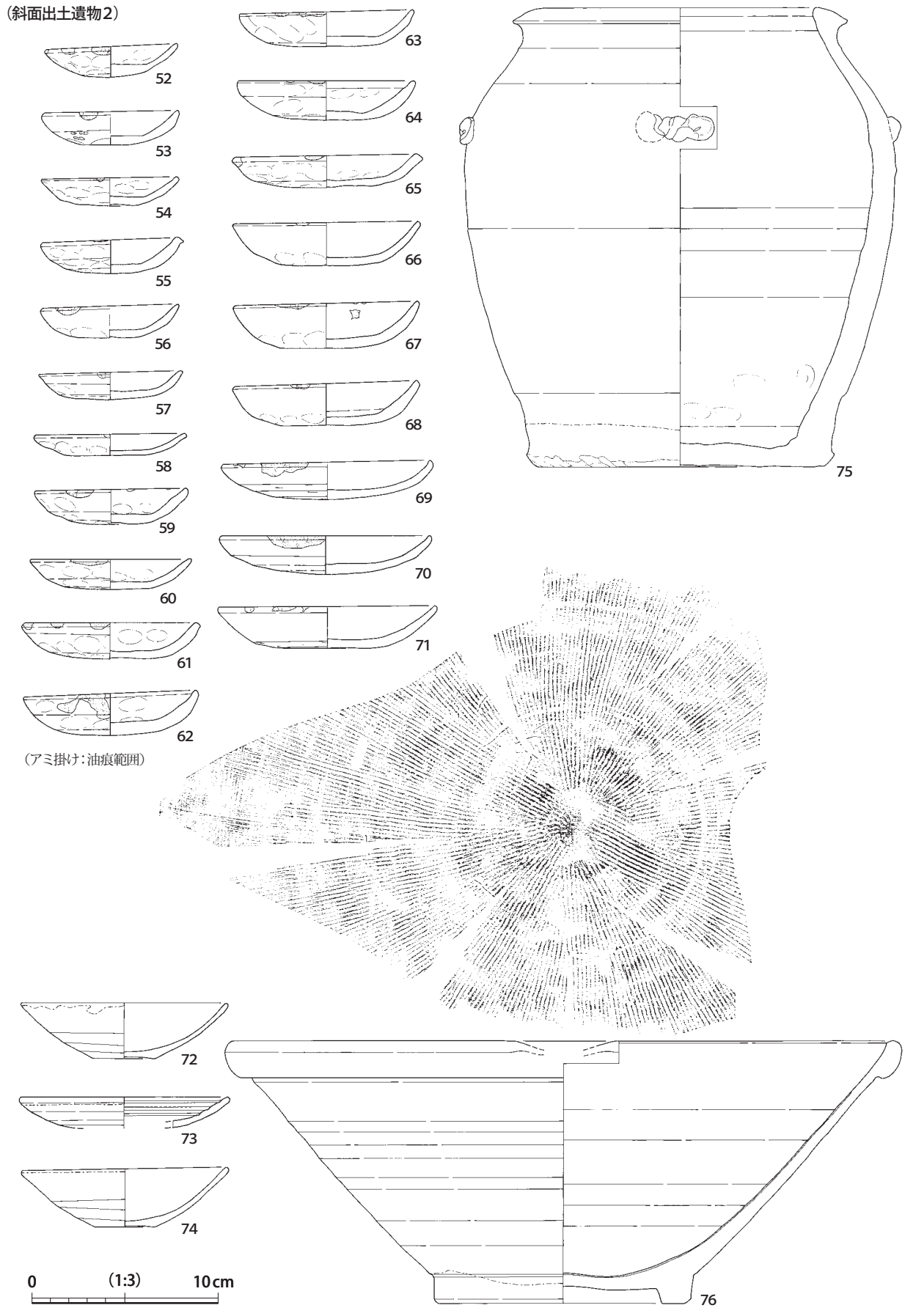


（縮尺　トレンチ10西面：1/100、その他：1/60）

第20図　検出遺構・遺物８（南東斜面２）



第21図　検出遺構・遺物９（トレンチ、南東斜面遺物１）

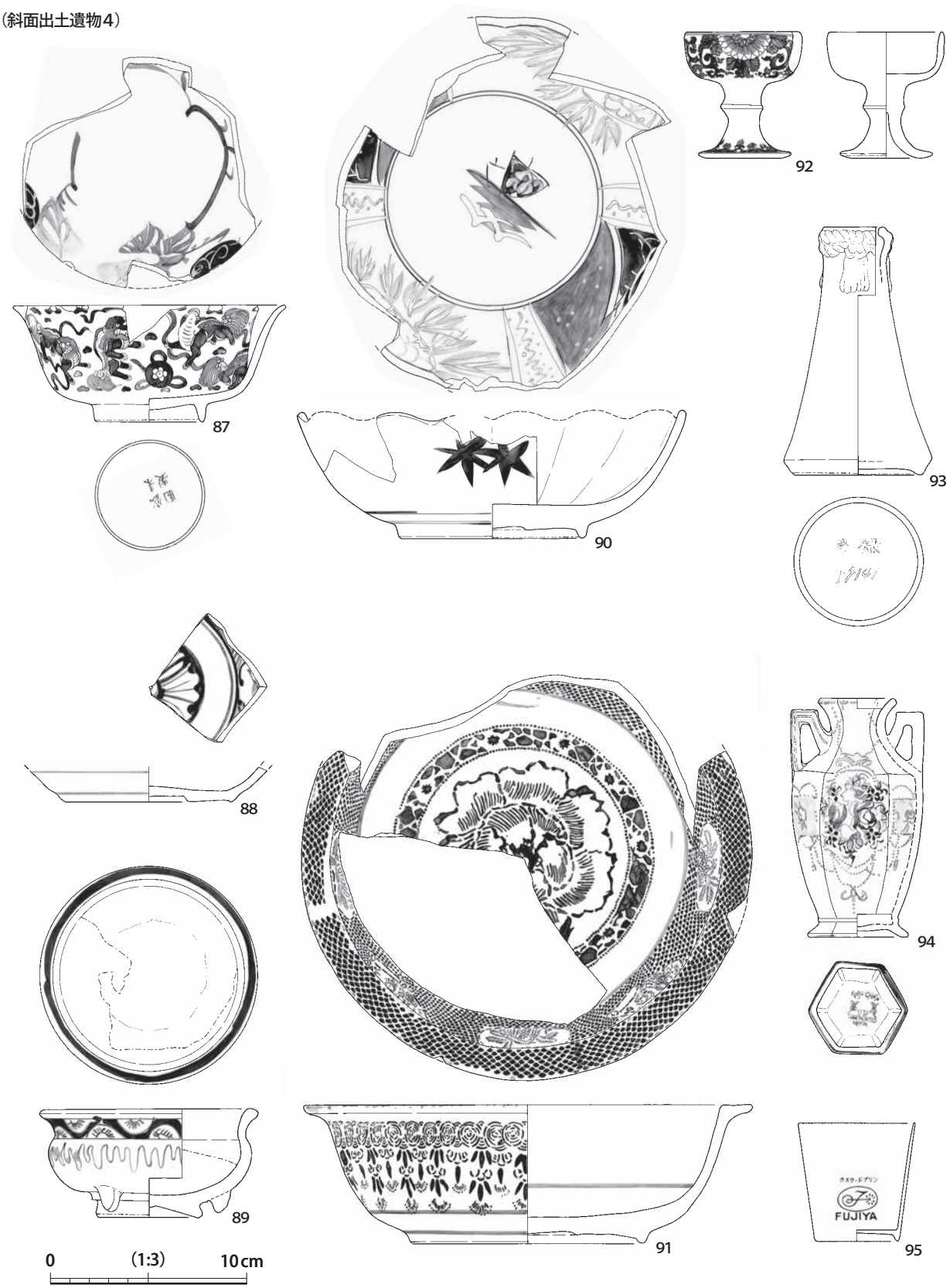


第22図　検出遺構・遺物10（南東斜面遺物２）

（斜面出土遺物３）

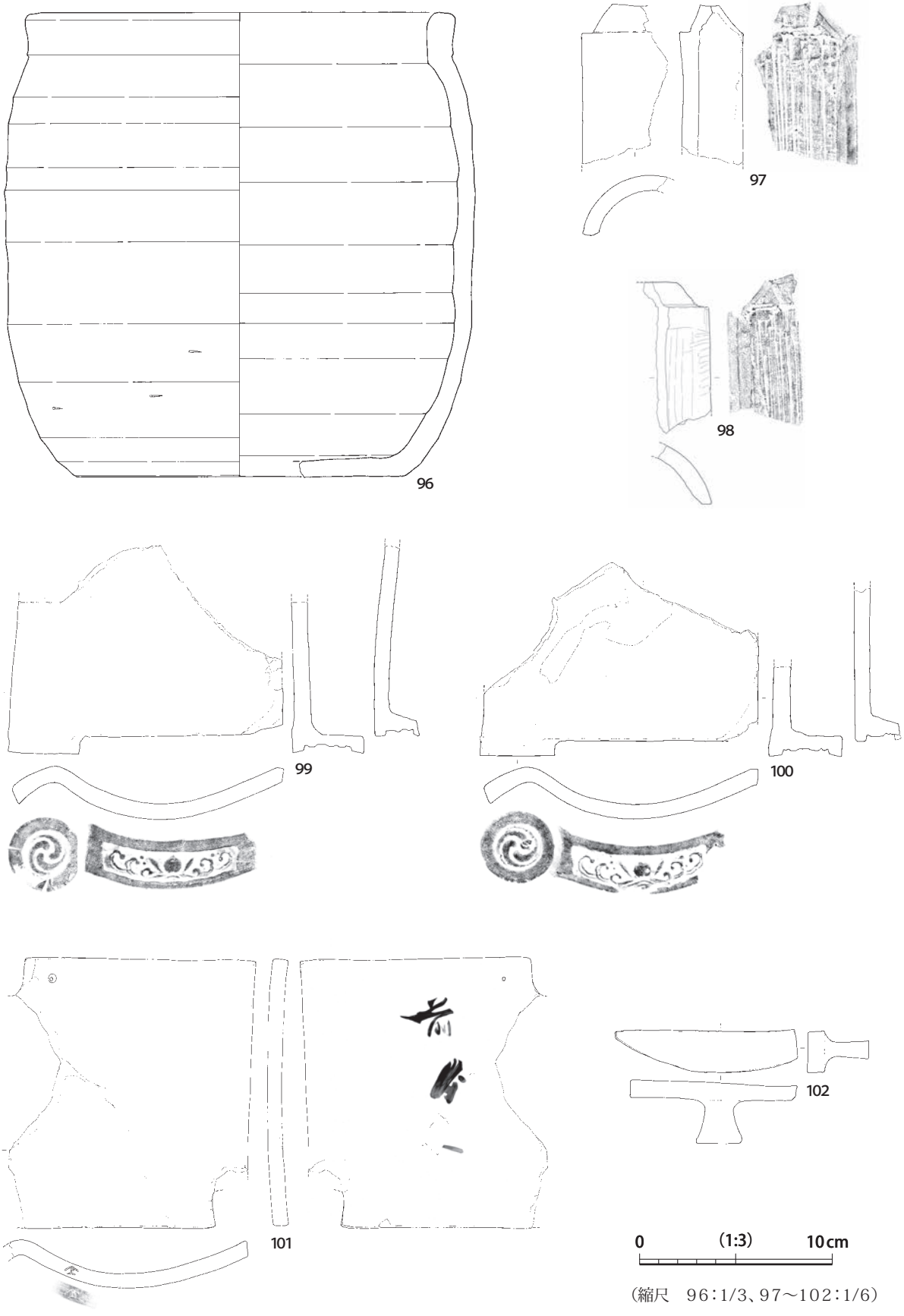
第23図　検出遺構・遺物11（南東斜面遺物３）

（斜面出土遺物４）



第24図　検出遺構・遺物12（南東斜面遺物４）

（斜面出土遺物５）



（縮尺　96：1/3、97～102：1/6）

第25図　検出遺構・遺物13（南東斜面遺物５）

報告番号	年度	出土地区・遺　構	遺物種類	器　種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	器面調整、その他法量、備考	図化番号
1	12	2-1 区 SK01	弥生土器	蓋				内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：摩耗により不明、つまみ径 4.3cm	C19
2	12	2-1 区 SK01 東半	弥生土器	高坏 or 器台		22.0		内調整：摩耗により不明、外調整：ﾐｶﾞｷ	C25
3	12	2 区 SK02	土師器	皿	7.2	3.9	1.6	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所	D27
4	12	2 区 SK02	土師器	皿	7.4	3.9	1.5	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所、底部穿孔	D31
5	12	2 区 SK02	土師器	皿	8.7	5.0	2.0	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 3 ヶ所、外面指圧痕	D32
6	12	2 区 SK02	土師器	皿	9.3	4.4	1.7	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所、外面指圧痕	D30
7	12	2 区 SK02	土師器	皿	9.4	4.5	2.2	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所	D29
8	12	2 区 SK02	土師器	皿	9.8	4.4	2.2	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所、外面指圧痕	D28
9	12	2 区 SK02/2-1 区 /1 区上	瓦質土器	蓋	20.8		4.5	内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、つまみ径 4.6cm、内・外面黒塗り	D14
10	12	2 区 SK02	釉薬瓦	軒桟瓦				全長 29.3cm、厚 1.9cm、軒丸瓦：瓦当径 7.6cm、文様区径 4.9cm、瓦当厚 2.0cm、軒平瓦：文様区厚 3.0cm、瓦当厚 4.9cm、顎高 3.4cm、顎下部厚 2.0cm	D5
11	12	3 区 SK03	弥生土器	壺	14.4			内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C15
12	12	3 区 SK03	弥生土器	壺				内調整：ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、外調整：ﾐｶﾞｷ、磨耗、胴部最大径 32.0cm	C29
13	12	3 区 SK03	弥生土器	高坏				内調整：ｹｽﾞﾘ、下半摩耗、外調整：ﾐｶﾞｷ、下半摩耗、孔 5 ヶ所	C13
14	12	3 区 SK03	弥生土器	高坏 or 器台		17.3		内調整：ﾊｹ、外調整：ﾊｹ、孔 2 ヶ所、内面ｽｽ付着	C14
15	12	3 区 SK04	弥生土器	蓋				内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C10
16	12	3 区 SK04	弥生土器	壺	13.1			内調整：摩耗により不明、外調整：ﾊｹ、ﾅﾃﾞ	C23
17	12	3 区 SK04	弥生土器	甕	14.0			内調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、外調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	C12
18	12	3 区 SK04	弥生土器	甕	13.9			内調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘか、外調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	C11
19	12	3 区 SK04	弥生土器	（底部）		4.0		内調整：不明、外調整：ﾊｹ、ﾅﾃﾞ	C7
20	12	3 区 SK04	弥生土器	（底部）		4.0		内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C16
21	12	3 区 SK04	弥生土器	（底部）		3.8		内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ	C9
22	12	3 区 SK04	弥生土器	高坏	23.8			内調整：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ、外調整：ﾐｶﾞｷ	C20
23	12	3 区 SK04	弥生土器	器台		12.2		内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾐｶﾞｷ、外面赤彩	C21
24	12	3 区 SK04	弥生土器	小型鉢				内調整：摩耗により不明、外調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ	C22
25	12	3 区 SK04	弥生土器	台付鉢				内調整：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ、外調整：摩耗により不明	C8
26	12	3 区 SK07	弥生土器	壺	16.5			内調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、外調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、外面ｽｽ付着	C24
27	12	3 区 SK07	弥生土器	壺				内調整：ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、外調整：ﾊｹ	C26
28	12	3 区 SK08/ 検出面	弥生土器	甕	16.0			内調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、外調整：擬凹線、ﾖｺﾅﾃﾞ	C6
29	12	3 区 SK08	弥生土器	高坏				内調整：摩耗により不明、外調整：ﾐｶﾞｷ	C27
30	12	3 区 P1	弥生土器	鉢	14.4			内調整：ﾊｹ、外調整：ﾐｶﾞｷ	C30
31	12	3 区 P1	土製品	土錘				長 3.2cm、幅 3.4cm、孔径 0.6cm、重量 17.0 g	C28
32	12	3 区 検出面	弥生土器	小型甕	15.0			内調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、ｹｽﾞﾘ、外調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、外面ｽｽ付着	C4
33	12	3 区 検出面	弥生土器	高坏	20.0			内調整：不明、外調整：不明	C5
34	12	2-1 区 SD02a.b	弥生土器	壺	14.0			内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C17
35	12	2-1 区 SD02a.b	弥生土器	有台鉢				内調整：ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ、外調整：ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ	C18
36	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 1	弥生土器	高坏		8.5		内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C1
37	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 2	弥生土器	装飾器台				内調整：ﾐｶﾞｷ、外調整：ﾐｶﾞｷ、孔 3 ヶ所	C2
38	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 3	須恵器	坏身	11.2		3.9	内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	D23
39	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 4	須恵器	坏身	10.8			内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	D22
40	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 4	須恵器	高坏		9.2		内調整：ﾖｺﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	D21
41	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 4 下層	須恵器	甕				内調整：当て具痕、外調整：ﾀﾀｷ後ｶｷﾒ、外面降灰	D24
42	11	南東斜面 ﾄﾚﾝﾁ 9	陶器	碗		4.4		外調整：ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗ切り、鉄釉、素地色：淡黄白、底部外面墨書「□」	D4
43	11	南東斜面 表土除去	石製品	打製石斧				最大長（12.4）cm、最大幅（7.2）cm、最大厚（2.4）cm、重量（245.2）g	石 1
44	11	南東斜面 坂上土壌	縄文土器	深鉢				内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：縄文、外面ｽｽ付着	D33
45	11	南東斜面奥 表土掘削	弥生土器	高坏 or 器台				内調整：ｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、外調整：ﾐｶﾞｷ、外面赤彩、孔 4 ヶ所	C3
46	11	南東斜面 4 表土掘削	弥生土器	（底部）		4.5		内調整：摩耗により不明、外調整：ﾊｹ、ﾅﾃﾞ	D36
47	11	南東斜面 2 表土掘削	須恵器	坏蓋	(11.2)			内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	D17
48	11	南東緩斜面 下層土壌内	須恵器	坏蓋	(11.2)		3.0	内調整：ﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ゆがみ大きい	D20
49	11	南東斜面 表土除去	須恵器	横瓶				内調整：当て具痕、外調整：ﾀﾀｷ	D35
50	11	南東斜面 2 表土掘削	須恵器	横瓶				内調整：当て具痕、外調整：ﾀﾀｷ、ｶｷ目	D18
51	11	南東緩斜面上 黒色土	須恵器	横瓶				内調整：当て具痕、外調整：ﾀﾀｷ、ｶｷ目	D19
52	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	7.0		1.6	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 3 ヶ所	D38
53	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	7.1	2.5	1.8	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所	D51
54	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	7.2	3.3	1.5	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所	D40
55	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	7.3	3.0	1.9	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油煙痕 1 ケ所	D39
56	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	7.3	3.4	1.8	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、指圧痕、口縁部油痕 2 ヶ所	D50
57	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	7.6	4.5	1.4	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所	D37
58	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	8.0	4.8	1.2	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、指頭圧痕、口縁部油痕 1 ヶ所	D52
59	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	8.1	4.2	1.8	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 4 ヶ所	D41
60	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	8.6	4.4	1.6	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 1 ヶ所	D43
61	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	9.2	4.6	1.9	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 3 ヶ所	D44
62	11	南東斜面 表土除去	土師器	Ⅲ	9.2	3.2	2.2	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕 2 ヶ所	D46

第２表　出土遺物観察表１

報告番号	年度	出土地区・遺　構	遺物種類	器　種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	器面調整、その他法量、備考	図化番号
63	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.3	4.2	1.9	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、指圧痕、口縁部油痕２ヶ所	D47
64	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.4	4.0	2.1	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕２ヶ所	D42
65	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	5.4	1.7	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、口縁部油痕２ヶ所	D45
66	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	5.4	2.3	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、指頭圧痕、口縁部油痕１ヶ所	D53
67	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	4.4	2.5	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、指頭圧痕、口縁部油痕２ヶ所	D55
68	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	4.4	2.4	内調整：ﾅﾃﾞ、外調整：ﾅﾃﾞ、指頭圧痕、口縁部油痕１ヶ所	D56
69	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	11.1		2.0	内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、口縁部油痕２ヶ所	D49
70	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	11.2		2.1	内調整:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛ、外調整:ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、口縁部油痕１ヶ所	D54
71	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	11.6	5.0	2.3	内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、口縁部油痕１ヶ所	D48
72	11	南東斜面 表土除去	陶器	皿	11.0	3.3	3.0	内調整:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、灰釉、釉色:ｵﾘｰﾌﾞ灰、浅黄、内面貫入あり	D10
73	11	南東緩斜面 No.4	陶器	皿	11.2	5.0		内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、釉色：褐	D7
74	11	南東斜面 表土除去	陶器	皿	11.2	3.2	3.1	内調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、灰釉、釉色：浅黄、内面貫入あり	D9
75	11	南東斜面表土除去／斜面表土上／斜面6／表土	陶器	壺（骨壷）	14.5	15.4	19.9	素地色：橙、釉色：明赤褐、他ｻﾋﾞ釉、越前焼か？、把手２ヶ所か	D6
76	11	南東斜面表土上／斜面表土除去／斜面６表土掘削	陶器	すり鉢（片口）	35.5	13.3	14.2	素地色：灰黄、釉色：外 - 暗褐、内 - 鈍黄褐、おろし目１単位 12 条	D8
77	11	南東斜面表土掘削／緩斜面No.3／斜面１表土掘削／斜面表土除去	陶器	徳利	2.6	9.0	27.1	灰釉、外面文字：黒灰～灰、内面底部溶着物あり	染 18
78	11	南東緩斜面 表土上	磁器	皿	10.8	6.4	2.1	染付（銅版印刷）	染 15
79	11	南東斜面奥 表土掘削／緩斜面No.19	磁器	皿	11.3	6.3	2.2	染付（銅版印刷）、口ｻﾋﾞ	染 14
80	11	南東緩斜面表土上／斜面表土除去	磁器	皿	11.6	7.0	2.7	染付、色絵（朱、金）、圏線３条	染 16
81	11	南東緩斜面 表土	磁器	皿	12.2	6.2	2.3	染付（銅版印刷）	染 13
82	11	南東緩斜面 表土掘削	磁器	皿	13.8			染付	染 2
83	11	南東斜面奥 表土掘削	磁器	碗	10.8	3.6	5.4	染付	染 1
84	11	南東斜面 表土除去	磁器	飯碗	11.9	4.8	4.8	染付（銅版印刷）、松の木	染 10
85	11	南東斜面 表土除去	磁器	飯碗	12.0	4.0	5.1	染付（銅版印刷：黒灰）	染 9
86	11	南東緩斜面 No.21	磁器	飯碗	11.4	3.5	4.7	染付（銅版印刷：青、緑）、緑外面文字「古梅園製」	染 17
87	11	南東斜面６表土掘削／斜面１表土掘削／緩斜面／緩斜面表土掘削	磁器	鉢	13.8	5.4	6.0	染付（銅板印刷）、内面色絵（ｵﾘｰﾌﾞ灰、朱）、底部外面文字「盛来園製」	染 12
88	11	南東緩斜面 No.33	磁器	鉢		8.4		肥前染付	染 3
89	11	南東斜面 表土除去	磁器	香炉	10.6	5.1	5.5	有三足扁平鼎形 色絵（赤、緑）、青緑色部分大方剥離、削り出し高台	染 7
90	11	南東斜面 表土除去	磁器	鉢	19.4	9.2	6.5	色絵（朱、橙、ｵﾘｰﾌﾞ灰、白泥）	染 4
91	11	南東斜面表土除去／斜面表土上／緩斜面表土上	磁器	鉢	22.8	11.8	7.1	染付、蛇の目高台	特染 1
92	11	南東斜面表土上／斜面表土除去	磁器	仏飯器	5.7	3.4	6.5	染付（銅版印刷）花に唐草文様	染 5
93	11	南東斜面 表土除去	磁器	花瓶	3.0	6.5	12.7	白磁、底部外面押印「登録 59101」、口縁部外面ふさ３ヶ所	染 6
94	11	南東斜面 表土除去	磁器	花瓶	3.7	5.0	12.2	色絵（赤、紫、緑、金、ﾄﾞｯﾄ）、色絵剥離、口縁他金絵の具残る、遺物は１対あり、「KINJOCHINA 毓」裏印（文字緑色）	染 8
95	11	南東斜面 表土除去	磁器	プリンカップ	6.0	4.2	6.0	白磁、印刷「FUJIYA ｶｽﾀｰﾄﾞﾌﾟﾘﾝ」、容量ほぼ 100ml	染 11
96	11	南東斜面表土除去／斜面６表土掘削／緩斜面	瓦質土器	壺（骨壷）	22.0	17.0	24.3	内調整:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、外調整:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、ﾍﾗ切り、口縁・外面黒塗り、12 年度２区 SK02（現代土坑）、２区（１区上）と接合	D13
97	11	南東斜面④ 表土掘削	釉薬瓦	丸瓦				体部全長（16.7）cm、体部幅（8.9）cm、玉縁長 2.9cm、体部高 6.6cm、体部厚 1.7cm、玉縁高 4.5cm、釉色：暗赤灰	D12
98	11	南東斜面 表土除去	釉薬瓦	丸瓦				体部全長（15.8）cm、体部幅（7.1）cm、玉縁長 2.4cm、体部厚 1.6cm、釉色：褐灰	D34
99	11	南東斜面 表土	釉薬瓦	小丸付き軒桟瓦				桟瓦：全長 28.3cm、全幅（25.9）cm、平部切込長（3.7）cm、平部切込幅 3.4cm、桟部切込長 3.8cm、桟部切込幅（1.0）cm、桟部弧深 3.0cm、平部弧深 3.4cm、押印、裏面に墨書「前□□」あり	D3
100	11	南東斜面 表土除去	釉薬瓦	小丸付き軒桟瓦				小丸部：瓦当径 7.6cm、文様区径 4.7cm、瓦当厚 2.2cm、体部：桟部弧深 3.3cm、平部弧深 3.9cm、厚み 1.5cm、軒平瓦当：上弧幅 28.6cm、文様区幅 14.0cm、文様区厚 2.8cm、瓦当厚 4.7cm、顎高 2.9cm、顎下部厚 1.4cm	D1
101	11	南東斜面 表土除去	釉薬瓦	桟瓦				桟瓦：全幅 28.7cm、桟部弧深 2.6cm、平部弧深 3.9cm、押印あり	D2
102	11	南東斜面 表土除去	釉薬瓦	面戸瓦				幅 19.0㎝、高さ 4.5㎝、厚さ 1.8㎝、奥行 6.4㎝	D11

第３表　出土遺物観察表２

調査地を北東から望む（河北潟干拓地遠望、４区調査時）

調査地を南西から望む（１・２区調査時）

調査地を南西から望む（３区調査時）

調査区全景（俯瞰、合成写真）

尾根上部（３区）全景（南西から）

尾根上部（３区）西側全景（北東から）

ＳＫ01完堀状況（南から）

ＳＫ01検出状況（南西から）

ＳＫ01土層断面ア（東から）

ＳＫ01完堀状況（北から）

ＳＫ02完掘状況（北西から）

ＳＫ03完堀状況（南西から）

ＳＫ03土層断面オ（西から）

ＳＫ04・05完掘状況（北東から）

ＳＫ06土層断面ク（西から）

ＳＫ06完堀状況（西から）

ＳＫ07完堀状況（南西から）

ＳＫ07土層断面ケ（南西から）

ＳＫ07底面壁溝（南西から）

ＳＫ08土層断面サ（北東から）

尾根上部（３区）西側、調査着手前の状況（北東から）

尾根先端部（ＳＤ01・02、加茂２号窯）完掘状況（南から）

ＳＤ01・02完掘状況（尾根上から）

ＳＤ02完掘状況（南東から）

ＳＤ01土層断面ウ（東から）

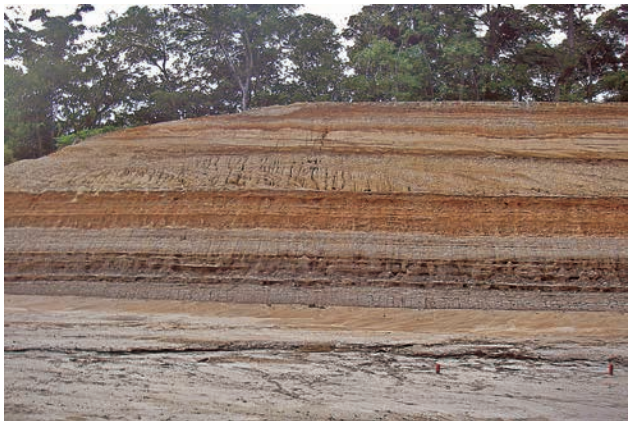
ＳＤ02ａ土層断面エ（南東から）

ＳＤ02ｂ土層断面エ（南東から）

加茂２号窯完掘状況（南東から）

調査区北東壁断面Ｂ（上半、南西から）

発掘作業風景（北東から）



丘陵縦断面（左写真の尾根を縦に切った状況、南東から）

1
3
4
5
6
7
8
9
10
11
13
14
16
17
18
19
20
21
22
26
28
31
32
34
36
38
39

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61

62
63
64
65
66
67
68
69
70
71

72
74
75
76
78
79
77
80
82
84
85
86
88
81
87
89
83
91
90

土師器皿

報 告 書 抄 録

ふ り が な	つばたまち　のせみなみＢいせき
書　　名	津幡町　能瀬南Ｂ遺跡
副 書 名	地方道改築事業(主)高松津幡線(河北縦断道路)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書２
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	澤辺利明
編 集 機 関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL (076)229-4477　FAX (076)229-3731
発 行 機 関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
発 行 年 月 日	2016年２月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘面積	発掘原因
のせみなみ 能瀬南Ｂ遺跡	いしかわけん 石川県 かほくぐんつばたまち 河北郡津幡町 のせ 能瀬	17361	1310400	36度 41分 20秒	136度 43分 38秒	20110801 ～ 20111221	250㎡	記録保存調査
						20120410 ～ 20120808	2,820㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
能瀬南Ｂ遺跡	集落跡	弥生時代	土坑、溝	弥生土器	

要　　約	旧河北潟を見晴らす標高23～31ｍ（平地との比高差11～16ｍ）の丘陵尾根先端部に立地する弥生時代後期後葉～終末期の遺跡で、大型円筒形土坑３基、小型の土坑４基、区画状溝２条を検出した。古墳時代末～古代頃に発生した地すべりや近世以降の墓所造営にともない削平された箇所が多いが、やせ尾根上に位置することからみて恒常的集落ではなく、丘陵下に営まれた加茂遺跡の弥生集落に付随する施設群であり、高所からの監視あるいは周辺集落との通信的性格を担った遺跡の可能性がある。

津幡町　能瀬南Ｂ遺跡

発行日　平成28（2016）年2月26日

発行者　石川県教育委員会
〒920-8575　石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話　076-225-1842（文化財課）

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話　076-229-4477
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　鵜川印刷株式会社